



いにし安永のはじめ、
 すみだ川のほとり長樂
 精舎にあそびて、也有
 翁の借物の辨を見侍り
 しが、あまりに面白け
 ればうつしかへり侍り
 き。それより山鳥の尾
 張のくにの人にあふご
 とに、この事うち出で
 とひ侍りければ、金森
 桂五うさぎの裘にはあ
 らぬ鞆衣といへるもの
 二まきをもてきてみせ
 給へり。翁なくなりぬ
 ときて、なを馬相如
 が書のこせるふみもや

いし安永のはじめに
 すみだ川のほとり長樂
 精舎にあそびて、也有
 翁の借物の辨を見侍り
 しが、あまりに面白け
 ればうつしかへり侍り
 き。それより山鳥の尾
 張のくにの人にあふご
 とに、この事うち出で
 とひ侍りければ、金森
 桂五うさぎの裘にはあ
 らぬ鞆衣といへるもの
 二まきをもてきてみせ
 給へり。翁なくなりぬ
 ときて、なを馬相如
 が書のこせるふみもや

あるとゆかしがりに、
 細井春幸天野布川に託
 してその門人紀六林の
 うつしをける全本をお
 くれり。まさかへしみ
 侍るに、からにしきた
 たまくをし、とみに
 梓のたくみに命じて、
 これを世上にはれぎぬ
 とす。翁の文にをける
 や、錦をきてうはおそ
 ひし、けたなる袖をま
 どかになして、よく人
 の心をうつし、よく方
 の外に遊べり。鶉ごろ
 もの百むすびとは、み

りやあしきしに細井春幸天野
 布川に託してその門人紀六林の
 うつしをける全本をおくれり
 まさかへしみ侍るにからにし
 きたたまくをしとみに梓のた
 くみに命じてこれを世上にはれ
 ぎぬとす翁の文にをけるや錦
 をきてうはおそひしけたなる
 袖をまどかになしてよく人の
 心をうつしよく方の外に遊べ
 り鶉ごろもの百むすびとはみ

づからいへることのは
にして、くつね(狐)の
かはのちどのこがねに
あたらざらめや。右の
たものみじかき筆は、
なへたるもはづかしけ
れど、たゞにやはと、
げにもはれにもかいつ
け侍りぬ。

四方山人

百むきいふうういふいふのさし
てらうりうれちのこひみあ
さうやあふううううううう
あううううううううううう
けううううううううううう

四方山人

あやしきはへもなきき
れぐを、あつめつど
りたるを、うづら衣と
はいふなり。げにその
鶉ならば、たゞふか草
のふかくかくるへて、
かりにだも人にはしら
るまじきものにこそ。

也 有

あやしきはへもなきき
れぐを、あつめつど
りたるを、うづら衣と
はいふなり。げにその
鶉ならば、たゞふか草
のふかくかくるへて、
かりにだも人にはしら
るまじきものにこそ。

世 有

うつら衣 上

奈良園賛

青によしならの帝の御時、いかなる歎慮にあづかりてか、此地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外はたえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれて公界にへつらふねぢ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは桐の箱の家をも求ず、ひさごがもとの夕すゞみ、雲ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また来る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれど

も、地帯をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝に馴てはだか身の寐姿をあなかしこ、人にかたる事なかれ。

傍着る日はやすまする園かな

蓼花巷記

一もとの芭蕉、五株の柳の其人の徳にてらされて、枯ぬ名をとめしもあるに、不仕合なる榎木はある僧正の號に呼れて、つるに斧の怒をかうぶり、なを切杭、堀池の名をさへ流しけむ。我劍冠の仕途に身を置ながら、一ツの隠家あり。これを蓼花巷と名づく。蓼花にむづかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一もとのゆかりなきにもあらず。松茸さふの聲きけばと、俊成卿の庭もせもなつかしく、世にわびたるさまのおかしければ、みづからこれが名とせり。そも

此幽栖、無何有の郷にとなりて、山に向ひ海にそひ、河あり野あり、月雪花鳥は四の時の詠を供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音までもきくにいとはず、見るにとほしきものあらず。城市を出て遠からねど、人たゞ杖、草鞋をもてとはむとせば、たとへ方土がまめはふみ出すとも、三輪の山もと杉立る門に迷ひて、ふせ屋のはゝ木々の霊狐に化され、うつしの山邊の道とふべき人にもあはで、ふたゝび桃源に棹さすごとくならむ。たゞ梅の色も香もしりて、思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづねあたらん茅門とはしるべしとなり。

物ずきの虫はきてなけ蓼の花

長短解

大はよく小をかね、短は長にまかるゝためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ君を賀

し人を暮くにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引て、五百八十七曲と祝ひものするには、あくかたあらじかし。その余はひたぶるに十八さたけのゆたけきにならへば、獨活の大本の謗をのがれず、矮雞の足はみじかきを愛し、禿が返辭はながきにのどけし。出る杭かしらうたれてつゐの益なく、下手の談議のとまりかねては、軒の柳もねむり貌なり。たと女の髪こそめでたくてあらましを、手ながき人は一門にも遠ざけられ、鼻の下ののび過たるは、大事の相談にもらされて、其夜の溫飴のながきをしらす。されば必ながきはみじかきが上にも立がたし。物はたと秋の夜のながくてよからむは長く、難波渦みじかき声の長からずしてよきはみじかくてあらなん。さるを聖人も右の袂の自由を物すけり。世に式法をこまかにさだめて、かね合極

るものもあれど、そのむづかしき境は人の製作なり。天地もと窺屈ならず、長短は自然にそなへて、寸分の詮議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、抄子さい槌はかた手にたれり。下さまの物ながら天理のまゝなるぞたうとけれ。我友田氏、過し頃かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西郊にあそぶ事ありて、調寶はなはだ長きにまされり。是をくはへて手からず、久くして齒を勞せず、ゆく／＼野山に雲を吹、あく時は袖におさむ。張子が馬を懷にするがごとし。こゝにおいて感あり。つるに長短の解をつくりて、是をむくふの詞にかふ。其辭の長過たるはまた才のみじかき故ならし。

木履説

木履々々、笠は東坡が春の野かけの尻に

しかるゝ折もあるべきに、などや汝は夏の日の宰予が枕にも履はれざる。日和つづきて隙なる時は、椽の下に寐ころび、蚤の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさゝれて、日待の壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま／＼かるわざのつなわたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は沓ぬぎにひざまづき、洗濯の日のこしかけとなりて、それよりうへの交はしらす。かく下さまのものがら狩人の笛となりては、口にふかるゝためしも有とや。その鹿の命を斷るは、罪ふかき身の果なれど、佛も下駄もおなじ木のきれと、例の一体のしめしに逢て、はじめて輪廻の鼻緒はきれてん。抑、足高きものを木履足駄と號し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一体分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳諧のうへに二ツの姿を論すべくば、ほくり

く」と静なるは、雪降の朝にして、下駄
く」といそがしきは、むら雨の夕部なる
べし。

鳥羽繪賛

蝦蟇の息に虹を起し、蜃はよく樓臺を吐。
腹中の虫、氣を吹て聲を出すも、さらに
あやしきわざには有べからず。くさめも
あくびもおなじものならんに、かれが出
所のいやしければ貴賤これをつゝし
て、かたく公界の嗜とす。されば退之が

鳴物づくしにも此沙汰なきは、もとより
はつしにてもやあるらん。その鳴こと不
平にもかぎらず、たゞ盛親僧都の芋の腹
味、あるは麥飯おなら茶の過食にさそは
れ、勢ひことに甚し。むかし太平記の無禮
講に、はじめて是をゆるしそめけるより、
つるに鎌倉に喫つけられて、七日の説法
屁一ツに破れぬれば、はては資朝・俊基

の屁負ひ比丘尼となられける。または雑
混寐のくらがり、ぬししらぬ香こそ匂
へれと、歌人はよみも置しか。思ふに鳥
羽の僧正の筆あとも、ひとへにたはぶれ
のみにあらず。かの音あれども目にみえ
ず、物にあとなくあたなる事は、更に電
光石火にまされるをもて、人につねなき
世のことはりもしらしめむとなるべし。

摺鉢傳

備前のくにゝひとりの少女あり。あまざ
かるひなの生れながら、姿は名高き富士
の峰にかよひて、片山里に朽はてん身を
うきものにや思ひそみけん、馬舟の便に
つけて遠く都の市中に出で、しるよしあ
る店先にしばしたづきをもとめけるに、
師走の空いそがしく、木の葉を風のさそ
ひ盡す頃は、世も煤掃のふるきをすて、物
みな新器を求るにつれて、ある臺所によ

き口ありて、富仕の極がてら摺木と聞へ
しもとに、うち合せの夫婦とはなりける。
かれは柏木の右衛門にも似ず。松木のあ
らくましき男ぶりながら、少もかざりな
き氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋
もなく、明くれいそがしきつとめもおな
じ心にはたらきて、とろゝ白あへの雪い
たゞくまで、糊米のはなれぬ中をねがひ、
水もらさじとはちぎりけるに、その頃副
つかひといひしおのこは、檜のきの木目
細かにその姿やさしきから、昔は御所に
うぐひすの名にも呼れしが、おなじつと
めの夜ふくる時は、走水の下のころびね
がちなるを、よそのいがきの目にもれし
より、さらでも住うき傍輩の中に、はし
たなき間鍋の口さし出、抄子の曲り心よ
り、うき名は立そめ、炮爆さへ仲ま破れし
てあけくれ茶釜にふすべられ、なら坂や
わさびおろしのふた面、とにもかくにも

たゝすむかたなく、身をあへ物の顔よ
れぬれば、買臣が妻の恥をいだし、手な
らひの君のむかしを思ひ、つるに土に
かへるべき無常をや觀じけむ。ある夜風
のあるまぎれに、柵の端より身を投げ
るにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきま
での姿にはなりける。かくては食物のつ
とめ叶はじとて、あるじの怒りはなはだ
しく、石漆の妙藥にも及ばず、妹脊の中
も引わかれ、内庭まで下られたれども、猶
さみだれの折は雨もりの役につらなれ

ば、いと長門の涙かはく隙なく、こゝ
にもすはりあしくなりて、井戸端にころ
かり出、蓼葎に埋れて、後はたれ衰とふ人
もなかりしに、ほどなく露霜も置うつり、
壁の虫の音もかれゆく頃ならん、間ぢか
き寺の門番にひろはれ、ふたゝび部屋に
かくまはれながら、ならはぬ火鉢にさま
をかへ、酒をあため茶を煎じて、ことし

はこゝにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅
もちりて、きさらぎの灸もすめば、また
灰をさへ打あけられ、唐がらしといへる
ものを植られしが、からき目ながらさて
あらばあるべきを、それさへ秋のいろみ
過つゝ、つるに橋つめの庭塚によごれふ
し、果はさがなき童部のまゝごとにくだ
かれ、行衛もしらぬ闇の夜の礫とはなり
けるとぞ。

武陽官邸記

百里の海山かぎりなくこゑ來たる目に
は、こゝに一年の起臥はと、顔に物のふた
がる様に覺えしが、けふよあすよとすめ
ば都の月もさし入て、寐心よき夢もむす
ぶばかりにはなりける。四疊ばかりの所
に、手ちかき調度どもかたづけて常の居
所に定めつ。庭は二三間に穴藏なかばの
場をふさぎて、のこれる所わづかなるに、

誰植すてし一ものつは、二ものつゝ
じ、花は時過て青葉つやゝかに、我たの
み顔なるを、そこゝと植かへなどして
朝夕の水そゝぐも、うき身わするゝたづ
きとはなれりける。軒の風鈴に夏山のす
ずしさを招き、壁のやぶれに色帯をおし、
障子のたらぬにあやしきすだれをかけ
て、月の夕暮なかば卷たるは、かの行平
の須磨の住居も、かくやと思ひ出らるゝ
に、うしろの松風とうぐと吹ならせば、
なみこゝもとになどぞひとりごたるれ。

西あかりの二階窓、御土居間ちかく梢さ
しおほひて、遠望をさえぎれども、富士は
木の間にくまなく、かきながら屋根はるか
に見こして、時しらぬ雪をあらそふ。常に
はなやかなるゆきゝはまれに、音なふ物、
念佛題目代待参り、あるは木魚のひゞ
き幽に、箔置の佛になひて、建立奉加のか
ねさはがしく、比丘尼は赤坂に畫の情を

賣て、夕暮のかへるさ雪踏を引つれ、辻君は白過たる顔明はなれて、手ぬぐひによしばみたれど心の動べくもあらず。隣は一重の壁をへだて、朝の火打の音ひやくより、摺鉢に客待日も、たばこさる日のつれづれなるも、紙帳に團の寐しづまるまで、こなたに物のかくれなければ、かしこにも又くまなくしりかはすなるべし。

日數ふるまゝに従者どもも所得がほに、貧乏樽にとうがらしを植て紅の秋を待、葭垣に刀豆を這はせ、塵塚に夢をそだて、鮮賣の聲をわふるなど、かく不自由のくらしを、商人はかしこく餅を艾の底に忍ばせ、酒に味噌桶の似せ酩酊を書付、御門の咎をのがれて、范蠡が忠をもとき、煮豆・和物に朝夕の飯時をかんがへ、雨のあかりは灸賣るなど、なか／＼おかしき住るのさまなりける。されば阿房の雲をしるのぐも、煤拂のやかましからむに、かたつ

ぶりの戸一枚もたず、うき世はぬめりわたりなるをや。たるもたらぬも住人の心にして、我は故郷の外とも思はずと、此心を額に題して、とひ来る人にも興じさせける。

餅 辭

君見ずや餅は例のおかしみありて、しかも四時の流行あり。まづは一とせの初空、松も竹もあらたまるあしたに、飯はもとより常住にして、なら茶麵類もしどけなければ、雑煮と趣向を定めたるぞ、神代の骨折のところなるべし。それより具足かみみびらき餅に、睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の團子をぞ、花よりとよみし人もありしを、草餅の節供に桃もちりて、つじ山吹とふけ行まゝに、まんぢう賣の聲もねぶたく、空は蛙に疊を呼れて、春雨

り焼にぞ、かの右馬頭が夜咄もしみつべけれ。卯月は例の卯花ぐもりに、蚊屋の香もめづらしく、やぶ蚊も軒にもちつく頃は、牡丹餅の花いとむまく、千團子とさくもたうとしや。粽はそのまゝに見るいとすどしく、ときたるほど假の匂ひ又おかし。水無月の朝日は氷餅とて、やごとなき上ツがたにももてはやし給ふに、草葉もよらるゝ土用の頃、水餅の鍋鉢こゝかび出たるぞ、上戸のしらぬすどしさなりけり。風も文月の音づれして、七夕のあふ夜はみきのみ奉りて、子のこの餅もまいらせぬは葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし。魂まつりも團子におくりすて、お萩の花に秋もたけて、こもちち月の團子より、栗の子餅の節句も過れば、十月はもとより亥の子の餅に荒初て、時雨こがらしの寒きまどに、火鉢のものとやき

餅も、おもしろき時節なるべし。やゝ御佛事のもちる始る頃、つもる粉雪もち雪もあられも、酒の名のみにはあらず。おとこの餅は朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あけてもいふべからず。さればよ、いかなれば詩人は酒のみ友にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の俳諧には、劉伯倫がのみぬけも、夏爐亭の餅すきなるも、ともに俳諧の趣向なれば、我門には上戸もめでたく下戸も猶めでたし。

鬼傳

むかしは佛の國に住しが、舍利をぬすみし科により、天竺牢人の部になりて、もろこしへわたりしを、鬼も十八のあだし心より楊貴妃の枕にしのびて、鍾馗といへる髯男に追はれ、かくれ簀の身も住うしとや、十郎姫にも引わかれ、赤裸に身代

たゝみて、はじめて日本へ親に似ぬ子と生れ出けるとかや。其頃はまだ涙もろくやありけん。朝雄が歌の理屈につまりて、一々先分散しけるまでは、さすがに横道なしと、役の行者の情ふかく大峯がつらきの荷持にも雇はれしに、次第に身持あしくなりて、煎餅もめづらしからずと、芥川のくらまぎれに、鬼一口のあばれ喰にむかし男を泣せ、そののみならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隠山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留主にと世上物躁になりけるにぞ、神々のいかりつよく、蠅終の責道具にかり出され、つるに煎豆の追放にあふて、娑婆にもたたずむかたなくて、冥途の出かはりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合あはぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覚え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、

朝寐辭

神儒佛の教さまゝなる中に、上はかしの好色、大江山の醉狂、戸隠山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留主にと世上物躁になりけるにぞ、神々のいかりつよく、蠅終の責道具にかり出され、つるに煎豆の追放にあふて、娑婆にもたたずむかたなくて、冥途の出かはりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合あはぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覚え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、

地獄の六尺とはなりける。擬こそ痛とられたる天下となりて、万民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も松風さびしく、安達が原の黒塚も草茫々としてとふ人なければ、今はたゞ棟瓦に佛をのこし、大津繪にわらはれて下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

神儒佛の教さまゝなる中に、上はかしの好色、大江山の醉狂、戸隠山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留主にと世上物躁になりけるにぞ、神々のいかりつよく、蠅終の責道具にかり出され、つるに煎豆の追放にあふて、娑婆にもたたずむかたなくて、冥途の出かはりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合あはぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覚え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、

万事は手代まかせならんは、身代破滅のはじまりなるべし。され世にする事なき姑の佛なぶりの朝起に、おも屋の家うちにそしられたらむより、これらは火燵に火をおこす間を、うち寐がへりてもあれかし。されば用をかきても寐よとはあらねど、三四五月の短夜に枕加減のよき頃は、朝寐こそ又おかしけれ。必目のさめぬにもあらねど、うつら／＼と夢見夢みず、花に朝日のにほひたるも、松に有明の残たらむも、かのねやながら思へるは、起てみるにもまさるべけれ。いつもの豆腐うりの聲行過て、車井の走るおと、雀の餌はみにあつまり鳴など、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物中の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四ツ頃にもたけ過て、さし心得たるわらはのくみ置たる手水湯は名ごりなくさめきりて、その奉公の水になるもかはゆし。

さればかしこけに朝起して、一日目のさめがたく、晝寐に光陰を盗まむより、枕序に朝寐たるこそましならめとさとりて、此睡工夫をなす事にむ有ける。さはいへ秋の夜長になりて、又朝起の面白き時は、たちまち朝起の男と呼るべければ、釋迦も孔子もしばし氣長にみゆるし給ふべし。

鶯を夜にして聞あさ寐かな

炮燂賛

一生をつくらひなく、その日ぐらしに覺えたる炮燂といふものは、圍爐裏のもとにいやしまるれども、その徳を論すればいとたうとし。鍋釜は眷族も多くわかれ、藥鍋など一號するは、銀に毛彫の繪様にほこり、數奇の茶釜は天明声屋の作にたうとまれ、探幽が下繪にあたえを高ぶれば、臺所の太郎二郎もをのづから、

氏族の榮に心おごりはするなるべし。炮燂は一類もなく、世にかゝつらふはだしももたず。盧全が夜なべに茶をほうじて、雨夜のさびに伴ひ、炙饗の豆のから／＼となる時は、隣のやもめの耳を悦ばす。いでや是を荷なふ商人は、程朱の説をかざれども、常に身をつゝしみて細道假橋を大足にはこばす。市中に股をくぐれどもふかくいさかひをたしなめば、馬士船頭の氣隨には似ざらん。なけくべきは本間の狂言に、羯鼓と威勢をあらそひ、又は歐陽公が工夫より精といふものを尻にぬられて、鯛をとる道具となれるは、をのが心にもあらで、にけなきわざながら、かのあし鼎の醉狂人の鼻をかゝし、石川五右衛門が釜いりより論すれば、罪は至て輕かるべし。しかるに和田殿の大藏がよひに、頭巾の名に物ずかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんかあた

まにいたどかるれば、かれは藥罐の下に
立む事かたくなありける。

ほうろくや棚から下りる秋の暮

隅田川涼賦

水無月のあつさのけふことにさめがたけ
れば、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、
牛込といへる所より舟出して、まつ涼
しおし出す舟に芦の音 などたはぶれつ
つ竿をめぐらすに、舟はもとより一葉の
ことくしからず、破子も場どらぬ趣向
ながら、けふの乗合に、手なみしれるくせ
ものもあればと、樽一ツはいかめしくつ
きすえたり。数々の橋こえ過、兩國の河
づらにこぎ出れば、風はかたびらの袖さ
むきまで吹かへすは、秋もたゞこの水上
より立初るなるべし。椎の木の蟬日ぐら
し、けふもくれぬと啼すさみ、岸の茶屋
く火影をあらそふほど、今戸あたりの

かけ船もともづなを解、糸竹をならして、
をのがさまぐにうかべ出ぬ。京に四條
の床をならぶるより、爰に百艘のふなば
たをつらねたるは、誠に都鳥の目にも耻
ざるべし。舟として諷はざるはなぐ、人と
して狂ぜざるなし。高雄丸の屋形の前に
は、花火の光もみちを散し、吉野屋が行燈
の影には、樺燒のけぶり花よりも覆し。幕
の内の舞子は鶯聲聞にゆかしく、軸先の
生酔は衛足みるにあぶなし。伽羅薰物の
かほり心ときめきて、吸物かよふ振袖は
燭臺のすきかけいとわかく、大名の次の
間には袴着たる物真似あり、女中の酒の
座には頭巾かぶりし醫者坊あり。かしこ
にどよむ大笑ひはいかなる興にかあら
ん。こゝに船頭のいさかふは何の理屈も
なき事なり。老人の茶會は仙家のかけを
うつし、役者の聲色は芝居もこゝにうか
ぶかとうたがふ。卵子く田樂く瓜西
瓜、三味の長糸賣る聲、西南にかしかま
しく東北に漕めぐる。風呂をたく船、酒
をうる船、菓子にあらぬ饅頭あり、鼓に
あはぬ曲舞あり、あるはみめぐり深川に
うかれ、あるは兩國の橋にとどまる。遊
ぶ姿とくなれども、たのしむ心ふたつ
ならず。それが中にも猶淺草の淺からぬ
ちぎりがへじ。待乳山の待やわぶらん
と、ふけ行空に漕わかれて、里にひかる
人もあるべし。さるはいかならむ遊び
も、おなじ心におもてをならべて、見も
しきかばと、こゝにだに物のかなしく、事
たらはぬ心地せむも、はたにくからず。
やゝ銀河の水東西にながれ、あなにくの
やめがらす、ひま白き松に啼かはせば、
さしも所せき舟もみないづち行けん、霧
わたるそなたに漕きえて、瓜の皮のみた
だよふ曉の名残こそ、見しには引かへて
また哀なれ。

謝無馳走辭

こよひのあるじ野有、人々に謝してまうす。ことごとく招まいらせて、汁に關殿の鯉も料らず、皿に張翰が鱸ももらす。夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鯉の花の名はちらせど、何をよし野々色香とはめでむ。さはれ旅路の椎の葉に、ものゝさびしき山家にもあらず。肴は宮の夕あかりを荷ひつれ、八百屋に二月の瓜をならぶれば自由はこゝも都ながら、もとより曾我の内證にして、いとなみとゝなふにわびしければなり。人々俳諧に信ましまさば、いざ是をしもにくみ給ふな。いでやか土器の味噌を思して給はずば、風雅に喰寄の他人むきを離れ、けふを鹿菜の矢合せとして、雨の夕べ雪のあした、鍋摺粉木はさはがせずとも、いざと心のむかふにまかせて、折々の

廻狀をはじむべし。さるも貧富は等しからず、我をそなたへ招給はむに、膏粱珍味のきらひならねば、よき魚よき肴はかへても給はらむ。まして茶ばかりたまはるとも、吾門のあそびならば、はたかこちまいらせじ。けふの無馳走は紫隱里の掟にして、菜根咬得ば百事なすべしを、貧

魚うりの聲よそにふけ青風

鍋蓋額賛

むさしにかりの旅居せし比、あやしの店に求め出せるものあり。さるは鶯やほしからむ小鍋の蓋なりけり。さんは落て釘の跡のこり、月もるばかりの節穴ありていと古うすゝけたる色のわざとならず。そのわびしさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけむ、借屋の婆の嫁をやふすべけむ、是をたつきとしろなしける哀

は、あみざこ賣る人にもまさりて思はるに、今はたこれを買取し我を、あるじのいかに見なしぬらむ。世に摺鉢に蓋なきと諷はるゝを、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引わかれし。いままらに異鍋にうちきせたらむは、小夜衣の名に立もうしとあはれに見しまゝに、物よくかく人かたらひて、これを閑居の額となしぬ。

たれ雑炊に落葉たきぬる

すゝけし昔とへどこたへず

われわれ鍋の世をのがれなば

よし綴蓋の汝とあそばむ

問菊辭

植すてし菊のをのづからに瘦、をのづからにひらきて、赤きはたどあかく白きはたどしら菊なり。今や世上の富家にかしづかれて、箱に戸ざゝれ曲尺にあてられ、花は年々にあたらなる其全盛を人にな

とへば、傾城といへるものうきふしの
里にうられ、高雄奥州と時めき立て、心
にあらぬ人にめでられ、あだなる枕に起
ふすたぐひ。かゝれとてしもたらちねは
そだてじ。かゝれとてやは雨露はめぐま
む。むかし彭祖が盃にくめば、八百歳の
齡をたもち正成が旗にゑがけば、十萬騎
の敵をなびかす。癡人はこのためにたの
み、愚將はかの功をうらやむとも、それ
だに花のころにや高ぶらん。菊よ。こ
ころみに物とはむ。その肥たるやしたは
しき、この瘦たるやうれしき。よしさら
ば答やとも、汝が心われよくしりぬとさ
さやけば、秋風の物いはぬ花をどうなづ
かせける。

我菊や尺とりむしの手もからず

俳席之掟

一 飯は三石の掟を守るべし。

茶の花の頃をなら茶も盛かな
一 汁一茶一酒の肴も一ツに限りて、經
に精進の咎をのがるべし。夏は必茄子
を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。香
の物は論するにたらず。

晋も香もせぬや豆腐の冬籠
一 酒は膳の前後をすべて三盃を過べか
らず。さるから盃は得道具をゆるすべ
し。

いかさまに四たびはくどし村しぐれ
連衆に酒すきありて、此箇條の掟
にはなはだくるしむ。よつて了簡
の一句をしめす。

狐さへ五こんとどもる霜夜かな
一 菓子是其日のあるに任す。まづは煎豆
に定むべし。

煎豆に昔こきまぜてあられ哉
一 燈は行灯にて事たりぬべし。
蠟燭はたつといふ名の寒さかな

右之條々けふよりかく守るべし。亭主
に卓下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も
古し。此やくそくをそらになして、厚味
を求むる輩あらば、後の世蠅とむまれて、
風雅に不信第一の人とすべし。

元文元年

誓文はたてぬ筈なり神無月

藏人傳

天に信天翁あり。地にはあすならふとい
ふ木あれば、人にも此おのこありて、か
の世にむかしよりいひわたれる。

世中にねたはどらくはなきものを

しらであほうが起てはたらく

とよめる歌の、これが返しとはなくて

はたらかで起て居る身の氣樂さよ

寐てもあほうは物思ふ世に

とよめりけるを、何がしの大將は大きに
此歌におどろきて、物ぐさの藏人と召れ

けるより、世にはなまかはの藏人ともよぶ事になむ。されば此うたの心はその藏人ならでしりがたし。たと藏人もしらずしてやよみけむ。

寐てや樂起てや安き雪の竹

夢 辨 (辭ナラン)

節分の夜の寶船に一年の幸を待より、一富士二鷹の品定も、これらは和朝のならはしにて、唐人の耳には日本人の寐言なるべし。されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕はあまり古ければさらにいはず。蝶となりて漆園にたはぶれ、蟻にひかれて槐國にあそぶ。かしこき雲の上人は、うば玉の夜の衣をかへしては、銀いらすの戀をもたくむらん。あるはかつらきの神にもかぎらず、晝は見しらぬ神とも、七日満するあけがたの枕上には、まみえさせ給ふなる。かゝるたつとき夢の告を、

佛はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへごとより、人は現も夢の部に入て、世中をいとふまでこそうたてけれ。とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起てたのしみねてたのしまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。鬼神に横道



うづら衣 下

鼻 箴

しのぶの浦のみる目は、もとより耳とも口ともつゞけたらむ、歌にもさのみけやけからず。いかなれば鼻といふ名のひとへに俳諧にはとどまりぬらむ。末摘花の

なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰が定めたるぞ。鬼神は聞てよろこび、傾城は聞て腹たつらむも、聖人ばかりは何とも思ひめさず。さるは冷にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御こゝろこそ世にありがたけれ。

わる口もあからさまにはよみなし給はず、そのおかしみこそ俳諧にはうれしけれ。さりとて隣の尻のこて、いやしむたぐひの物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間露霜のをきどころなくて、いかに寒からむ。見よや人の老ゆけば、目は遠山の霞たな引、耳には鳥虫の聲もうと

く、口は冬がれの齒も落て、盛衰まのあた
りかなしみを催す。たとへ百年のつくも

手水鉢銘

髪だに、鼻ばかりはかけもやらずつづれ
て用をかく事もなし。ひとり常盤の操を
守りて、時しらぬ山とも稱すべけむ。され
ばおそるべき人心、むかし聖賢のおしへ
にも、視聽言動の四つばかりをあけて、
鼻に簪のゆるがせなるより、世におごり
のきざし起りて、寵にはこる妾小姓のお
ほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩
をも、鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻
つくあやまちも仕出ぬる。えならぬかほ
りにひかれよる色のいましめは猶さら
にして、女のよれる髪筋には、鼻の高き大衆
もつながれ、あほうの延せる鼻毛には、
蜻蛉もつらるゝためし。わざはひ蕭牆よ
り起るときけば、つゝしむべきは鼻のさ
きなるべし。

いでや此手水鉢に若水くめるあしたよ
り、おこたらず立なれて齒みがく楊の枝
をうつし、軒端の梅のひとえに清かれと、
時に口すゝぎ時に手あらひて、あらは
心の塵もなかは去さるむ。さるに此亭
に愛せる鉢は、石なるや銅なるや、もしは
陶なるや。我さらにしらねども、水はもと
より方圓の鉢にしたがひ、鉢はたゞある
じの物好によるべし。見ずや此水の四時
にたへずして、しかも朝ごとにもの水
にあらず。万理のこれにこもれるが中
にも、風雅のことに水に似て世々に盡す。水
に似て時々にあらたなるも、汲てしらば
こゝにあきらかなるべきを。されば頃日
人につたへて、予に此銘を求る。我きく
湯の盤に銘して日々に新なりとは、もと
の汚を濯ひさりて、心も日々に清かれと

也。まして此物は飯くひ酒のむすさびに
も、常に柄杓を手ふるれば、しばらく
俳諧のおかしみをはなれて、これに時々
新の三字を銘せむに、かの盤の銘にもま
さりて、先聖もたしかにうなづき給ふべ
し。世はよし五月雨のはれみくもりみ、
滄浪の水は濁るとも、ひとつ此水の底清
からましかば、纒を洗ひ耳をすゝぎて、長
く閑居の契をもむすべとぞ。

汲かへてもとの月あり手水鉢

名德利説

つくねんと静なる時、泥塑人のごとしと
は、賢徳の姿をほめて此物にはあらされ
ども、したしめば一團の和氣あたゝかに、
雪の夜あらしも身にしまざるは、これが
ためのたとへにもいふべかりける。まし
て備前の名産にして、六升ばかりを入る
るときけば、たとへ八仙の客にはとほし

くとも、浣溪の禁足は忘るゝにたりぬべし。なを此物の徳を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これがたぐひにはいふべからず。あるはちろりといひ、間鍋といひ、

前後左右のむづかしみありて、弦によそほひ樽をかけて、實は心のとけざるかたもあるべきに、たゞ此物の口をそらさまになして、なみ居る人の中に出て、いづれに向ふともなく、たれにそむくともなき姿をもそなふなるべし。此ぬしこれに名を呼む事を求む。むかし子猷が竹は見ぬ日ありとも、さてやみぬべし。此ぬしのこの物における、一日もなくてはあらざるべく、つねに膝下に召まつはさるれば、かの此君の名の古きを尋て、此童とよばんにいかゞ有べき。されば世の近侍の童は、立居に尻のかるきをほむれども、此童の奉公振は、たゞいつまでもいつまで草の根つよく尻の重からむこそ、

主人の心には叶ふなるべけれ。

月に雪に花に徳利の四方面

樂老記

雞肋堂にめでたき徳利あり。もとよりその名を此童と呼て、あけくれの愛をかうぶりしに、ことしまた一つを求出で、樂老と名ほし着せけるとぞ。されば昔男ありけり。井筒の女の底意なくかたらひける後に、高安のこほりに行かよふ所いできにけるは、ゆには心の花のうつろひて、まさかたに引るゝあだし心ならむにや。これはそのたぐひにはあらで、主人の腹のはかりなきに、此わらはも折ゝの宵ねにこりて、たゞこれをもてかれをたすけ、かれをもてこれがたすけとなせれば、棚に兩雄の争もなく、此童に月をむかへては此樂老に月をゝしむ。着校すでに狼藉して水雞炊のやゝしらむ比、此童は膝に

ねころべば樂老は枕とこけて、主人の鼾の響わたり、その柳もねぶりそへたらむは、おもしろき四睡の圖なるべし。

旅 賦

春は乗かけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは参宮の都道者か。夏はさみだれのかきたれて金谷島田に大名の市をなし、秋は木曾路の木々も紅葉して猿三聲の涙、ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は鈴鹿のふときに飛脚の足を定かねたる、いづれもとりの哀なるべし。五十三次の紀行はあまねく人のいひふるせど、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、さよの中山に旅ねの詞をつとけ、宇津の山邊の葛にまとはりて、十圓子のさびしさはしらす。さらねば寺社舊跡の由來書、道のり方角の詮義に落て、猶俳諧にひらふべきものはこのれり。許六が賦に馬かたの

境界を盡し、木導が説に出女の盛衰を述
たり。しるてそのまねびせんとにはあら
ねど、例の腹ふくるゝわさなればならし。
旅の哀といへば、西行の笠しめつけ、宗祇
の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、
たとへ煙草盆の銀かな物はかどやけど、
竟日の駕籠に足をいため、轡子の夜着に
雨もりをきくも、旅ならずしてはいかで
かは。いでや本陣の夕ぐれは、たて砂に幕
をひるがへし、すそする馬のしりをなら
べ、亭主が翼はそゝけながら、上下に泥
足をすゝぎて、塾臺に小鯛のはね廻りた
るは、さすがに草枕とはいひがたかるべ
し。下宿のさまは引おとりて、見せ先に
居風呂ふすほり、小くらき行灯の陰とり
廻して、ねころぶものは木まくらに風を
つぶし、まだねぬ者は取かへ錢の勘定に
のゝしる。人よふ手拍子のならぬこそこ
とにわびしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋
うり焼酎うり、あんまけんびきの聲もお
さまりて後、拍子木丁として、これらば
いかめしき旅の一体なり。すべて旅籠屋
の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ぬはな
し。畑峠には山みづをしかけ、大磯小田
原には小石をまきちらす。塀にしのびが
へしはありながら、大戸のかげがねはひ
づみてかゝらず。湯殿は無性にひろくて
蜚鼠を迷はし、雪隠の臺は座敷よりつら
なりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れ
かゝり、塾の啼こそ哀なれ。膳にはいな
だの鯨かすかに、鰹のやき物、大根葉のあ
え物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺
束なく、箸のふときはいく度もけつり直
さんとにや、いとうるさし。出女を赤まへ
だれとは、みやこにちかき名のみなるべ
し。宵は返辭の尻がるに立廻り、鼻歌に
雨戸はしらかすも、こよひいかなるさゝ
やきの橋をかけたるちぎりもとこそゆか
しけれ。沓草鞋笠の頭甲はゆく先々の店
につるし、あやしのはなれ屋には竹につ
けて道はたにも出せり。赤表紙の道中記、
おもりに鉄鑢をさけ、櫃のほた餅にはす
す黒き雜巾を覆ふ。箱根の赤腹は巻わら
にさし、梅澤の鮫鱈は鍵にかけて軒につ
るす。されば日よりは天道次第ながら、
さしも大井川は膝だけにこして、思はぬ
酒匂に二日留られたる、あら居の茶屋に
うなぎのあたらしき日は、親の精進にあ
たりて、ひしけたる小家に日こしの焼餅
をくふなど、きのふは絹寶に道づれして
大濱に溫飴をふるまはれ、けふはぬけ参
の介抱して、天龍の川風にあたらしき笠
をとられたる、哀樂日々にうつりかはり
て、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬな
るべし。旅に哀をすることは、その行客の身
の上のみにあらず。駕かる人はかく人の
達者をうらやめども、駕かく人はかる人

の錢をうらやむ。小揚のあひことばいつの世よりの洒落ならん。やみけんことは三十五文にして、またと坂東とは二十八文なるべし。朝は鳥羽の早道にはしり、晩は姫路の女中をつりて、身は定なきむらしぐれ、雲助のゆく末もいとこころもとなし。疝氣^{陰莖}たまの川越の首に髭奴のまたがりて及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの座當のせて、くらがり時こそ、いづれ世わたりのかなしからぬかは。それが中にも口の過たる船頭は大坂番にたゝかれ、鼻の落たる餅屋は六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、観すればみな旅にして、世を旅の空にたとへたるは、かりの住居といふのみにあらず。たのしみもくるしみも行先に見盡して、たとへ女院の六道の沙汰とて、も是にもれざるべし。たゞ俳諧師のなる果のみぞ、棄恩入無爲のしめしもまた

す、ふつゝかにあたま丸めて、吉野初瀬の春をゆかしみ、松嶋象潟の浪にうかれ廻り、三文ねぎりに戻り馬にはぐれ、乗合なくてわたし舟も出さず、たが爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道のりをつもりちがへて、きのどくの山かけに一夜は一ッ冢の情をかりて、すゝき折たく圍爐裏ばたに膝さらあぶりながら、虫歯やむ子にまじなひ致て稗園子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺をたづねれば、和尚は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名残をうしまれて松茸に喰あきたるなど、水雲万里をうかれありきて、ほだしなき身のやすさながら、その下人を孫平とは、我伯母輩の名なるものをと、ふと故郷の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路東海道のかくりごとながら、のぶれば行程千四十里ばかり、猶ながらへていかばか

りの旅行もしらねど、ことしは齢も四十の老ちかく、しきりに懷舊感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書て寓居の筆をつるやすも、まことはあぢきなきすさびなるべし。

借物の辨

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりてつらぬきとめぬ王ともちるなり。むかし何某のみことの、このかみのつりばりをかり給ひしより、まして人代に及んで一切の道具を借るに、借すものもたがひなれど、砥の挽臼のといへるたぐひは、借すたびに呑ひきく、鏝ぶしはかりられて瘦てもどるこそあはれなれ。金銀ばかりは徳つきて戻れば、もとかる事のかたきにはあらぬを、かへす事のかたきより、今は借る事だにたやすからず。むかし男ありて、身代もな

らの京春日の里にかす人ありてかりにい
にけるより、やごとなき雲の上人もかり
にだにやは君は來ざらんと、露ふか草の
ふか入し給へば、鬼のやうなるものゝふ
も、霜月頃よりは地藏顔して人にたのむ
のかりがねは尾羽うちからして、春來て
もこし地にかへらず。かりの宿りに心と
むなど、人をだにいさむる出家達も、借
らでは現世の立がたきにや、二季の臺所
には掛乞の衆生來りて、色衣の長老これ
が爲におがみ給へば、又ある寺には有徳
の知識ありて、これはこちらから借しつ
て、きりの算用滞れば貧なる檀方を呵責
し給ふ。かれもこれもともに佛の御心に
はたがふらむとぞ覺ゆる。そも顔子陋巷
にありて、いがきのめし瓢單酒に貧の樂
をあらためずと也。さるを今世の人ゝ借
金の山なしして、是を苦にすれば限なし。百
までいきぬ身を持て、さのみは心をか

しめむや。一寸さはやみの世ぞと放言
に腹うちたゝきて、家は貧に安んじたり
など、おなじ貧樂の引ことにいふは、や
るせなき心のはらへならめど、まことは
雲水の間違なり。なべて世にある人の衣
服調度をはじめて、人なみなならねば耻か
しとて、そのためにかねをかりて、世上の
耻はつくらふらめど、人の物をかりてかへ
さぬを耻と思はざるは、たと傾城の客に
むかひて、飯くふ口もとを耻かしがれど、
うそつく口は耻ざるにおなじ。かくいへ
る我も借らぬにてはなし。かす人だにあ
らば誰とて、かりのうき世に金銀道具
はいふに及ばず、かり親かり養子も勝手
次第にて、女房ばかりはかりひきのなら
ぬ世のおきてこそ有がたきためしなれ。
かる人の手によごれけり金銀花

訪剃髮辭

五夕剃髮して桐の坊といへりとぞ。まづ
は殊勝の法師ぶり、名をきくよりやがて
佛の推はかるれ。されども十徳はきる
やきぬや。腹汗はくふやらん。くはしき
たよりはいまだきかず。

襟垢の世をぬぎ捨て紙衣かな

猫自畫贊

此小ふすまの白くてさう／＼しきに、物
かきてえさせよとあるに、さらに何かく
べしとも覺へず。されど辭してもゆるさ
るまじきかたをはやくしりて、よしさら
ば此棚に鼠のあれぬまじなひせむと、お
こがましく筆とりて書たるは何ぞ。我は
猫なりと思へども、大宮人はいかにふ
らん。むかし金岡が書たる秋の戸の馬は、
よる／＼萩を喰あらしたるか。もしは
さる能畫の筆して、四條のすどみ清水の
花見など、にぎは／＼しき繪の屏風襖にも

あらば、あまたの人の夜ごとに出て扶持
方もつゞきがたかるべし。我が袋戸の猫
は、たとへず千とせふるとも、赤手
のごひの踊もしらず。まして肴のたなさ
かしもせねば、あるしの爲は中々心やす
きかたならむを、朧月夜にうかれぬのみ
ぞ、玉の扨の底なしとやせしられぬべき。
世につたなき筆の虎をゑがきては、必猫
なりとわらはるれば、われ又猫をうつさ
ば虎にも似るべきを、抄子にはちいさく、
耳かきには大きなりと、かの柿の木のみ
かし咄ならん。かくいへば鼠の爲とても
よしなし事に似たれども、いでや鼠にも
白黒の賢愚ありて、子祭の白鼠はあるじ
もいざにくむまじければ、かしこく知り
てさけぬもよし。心の鬼のわる鼠のみ、
これだにも氣つかふべきは、落武者の薄
の穂を人なりとみるたぐひにて、少はそ
れよりも近かるべし。さらば牡丹花下に

てふを驚かさむよりは、此棚にねぶりて
かのわる鼠をいましむべしと、かれにし
めしの一句にいはいく、

ゆだんすな鼠の名にも廿日草

戀 説

かはゆき子も旅はさせよといひ、戀は道
ならぬ道もあれば、ふみ迷ふさのゝ冊ば
し親もさけて、あだし心はいざ神とても
いさめずやはあらむ。さてしも世にたへ
ぬすさびにて、身にこそ人のいましむべ
けれ。そのくま／＼は尋わけてぞ物の哀
もしる端なるべきを、歌にはもとよりも
つばらにして、荻の上葉にとはぬをうら
み、有明の月に別れをかこつより、沖の
石に涙をかけ、衛士のたく火に思ひをよ
そへて、たとへ雲かゝる高間の山も、浪
よする高師の濱も、てにはの詞に品はか
ざれども、逢ふの別るゝの、忍ぶぞうら

むぞと、たゞ一筋の情のみをいひて、女の
男を思ふやらむ、男の女をしたふやらむ、
妾に千變の品はわかれず。俳諧は万化に
くだけて老若貧賤をわかつより、妾に自
由の働あれば、井筒がもとのうなひ子の、
手鞠もらふたる情わすれず。源内侍の十
夜参りは紅裏に名をたてゝ、逢ふの待つ
のと詞にはもたれず。其句の妾に戀をみ
すれば、戀を一句で捨る事歟と、他門の
初心の迷ふもこゝならん。しかればかの
法師の筆にもかける。まゝ男女の情は難
の夫婦に立ならびたる中をのみいふ物か
は。逢はでふめりし娘を思ひ、小ぶとき
乳母をかこち、長廊下にまどひ明し、向
ひの女房を詠やり、淺茅が宿に後家忍ぶ
こそ、色このむとはいはめ。ことにみやこ
のおそるべき、所々に遊里の軒をきしれ
ば、しばしこそ親の關守もかたけれ。物
よみ話のつれにさゝやかれ、東は朝日の

陰なる遊びも、つのはば西にかたむき安
く、もらひのなりし夜は面白く、くぜつ
にあけし曉はおかしく、うそは誠にかく
れ、恨は情に負けてより、人のいさめ世
のそしりも行過の古みに見下し、宿はお
留守の夢のうき橋程なくとだへして、春
るものなど久しからむや。秋風内證に吹
わたり、出口の柳身すほけに散初るより、
丹波口の茶屋も見ぬ顔して、身をこりす
まの浦ならずも、うしろに山の借金負と
なれば、今出川の家も質に流れ、姉が小
路の妹髻よりすが求て、今ぞ落目の境
に下り、わづか二三年の夢茫然とさめて、
思へば千束の文は何の爲になりけるぞ
や。昔の孔子も今の伯父坊も、異見はこ
この事なるべし。新町ももりの夕ぐれ、
木辻鳴川の曙、もろこしちかきまる山と
ても、おなじ戀風はふきかよへど、猶と
り／＼に加はる俤は、色をも香をもしる

人やしるらん。まして江戸ざくらの花や
かに、人の心のはりもつよく、上野淺草の
花ぐもりより箕の輪の雨の名にぬれて、
土手の露ふむ戸なし駕より、今戸の舟の
こがれよこそ、遊びに巾の廣がり安き
は、さしもむさし野のふか入する人も少
なからじ。波にうかるゝうかれめ、草に
音をなく辻君白人比丘尼野郎影間、それ
とて賣かふものはさらなり、御油赤坂の
留メ女さへ、おかしからぬ事もよくわら
ひて、ねよけにみゆる旅人に、なじみの
文よみてもらひ、さし足袋賣たるえにし
より、七日つゝしむし始末もやぶれて、
一夜の露に落やすきは、いざ此道のなら
ひならぬかは。それよりの世のさま、人し
れぬ事のみ多き中に、お比丘尼のかたみ
わけに、似けなき文の箆笥から出たるも、
若旦那の鼻毛ぬきを物縫の部屋に見付た
るも、みな／＼跡のまつりなれど、物い

ひさがなき世にしあれば、うき名は千里
に立安きを、蚊をやく掃燭にいねわるき
蚊屋をすかし、小角豆つむ垣ねに隣の方
水をのぞくなど、わづかに蟻穴のあやま
り心ながら、身をはふらかす端ともなる
べしや。されば社吳服屋の手代は思はぬ
ぬれ衣着て、稻荷の前に掃屑をひろへば、
四條河原へ賣たる子の大名に抱へられ、
親までゆたかなる扶持方を得て、長かた
の銀こじりは、ひとへに我子の光なが
ら、むかしの念佛講中はからかさもどさ
ぬ謗ものこるべし。これらや一生浮沈な
れど、其源はたゞかりそめの檜原が露の
契にはじまりけむ。しかるに色白なる疊
さしありて、屋敷かたにてたばこ入をも
らひ、琴の指南の檢校が月見の夜から出
入とめられたるなど、あるはお寺から手
を廻して山歸來買るゝも、飯のくはるゝ
痞に、折々針立の泊りて行も、わけを糺

の神にとど、表八句につかはれぬ事も有べし。又は風俗にいにしへ今のたがひもありて、律儀なる漢帝は反魂香をたきて、よすがら夫人の面影をしたひ、榮耀なる隱居は地黄丸をのみて、季時に飯焼の器量をゑらむ。猫にひかれて見せめし

夕べは、玉だれのへだてをかこち、蚤にくはれて待わびし夜は、古夜着のうらみあかすなど、おのづから貴賤のけぢ目なきにも有べからず。荻蘆和尚の眞葛が原も、破戒の罪のそしりもなければ、其身に戀をせよとはあらず。戀に心の覺束なかりせば、前句に對して趣向はありても、句作も道具も取つつかたなく、思ふにも手の届かぬは、具足着て灸を搔くより猶不自由のくるしみあるべし。いでや戀といひ旅といふ、旅はかたちを勞して情は後なるべく、戀は情を先にして哀は姿に品をわかつて、内外いさゝか先後の

たがひもあらむか。さらば句案の上にも、其心あらざらむや。おそろべし、かゝる説は饒舌の罪おふべくして、只後の君子を待べきを、忍びもはてずして筆とり侍る。これもまた戀の闇に迷ふたぐひかも。

閑居記

忘るまじ、此一室はふるき世のわがゆかりなりけり。もとは城西の閑居にして、我曾祖母のいまそかりし、今は四十年の昔ならむ。その人おはせずなりて、鴉の軒をあらし、鼠の櫺を穿しほどもやゝ年あり。そのうち母のすみ給へるかに、ふたゝびいとなみしつらひつれば、あけくれの定省に寒暄をとひ馴しは、十とせあまり三とせばかり。千代もと祈りしそのかひもなく、むなしく風木のかなしみを抱き、桃李物いはぬ昔とはなりぬ。しか

ればこほつに忍びず、今官邸に閑地あるにまかせ、暫くこゝに引移し、猶香原や伏見の里もと契り置て、平生座臥の一、間となせるよりは、馴來つる眞木柱も我を忘れじを、我はまして馴こしかたの花もなつかしく風も忍ばしく、窓に雪みる夕べは早梅色養の笑をふくみ、軒に月もる曉は鷄聲鹽漬の期を告て、猶孝情の盡さざりし事を惜む。されば一室は八疊の南を請て、床も押込みもとみしまゝの名どりとよめつ。北に三疊のおくまりたる所、夏はあけわたして風を通はす便あり。中はまして冬ごもりによろし。爰に櫛さし、ともし火をかゝけて、讀書靜座のかくれ所とす。その窓に子猷が竹あり。陰を愛して杖にもきらず。その軒に弘景が松あり。聲をたのしみて蚊やりにも手折らず。脊戸には淵明が西嚮ありて、雪間の若菜つみそむるより、萱も酢味噌にとほしか

らず。茄子はもとより世に久しくて、あ
けくれのあつものには少あかるゝもつれ
なしや。牛蒡はほそくとも大根はふとき
をいとはす。まして芋は地に叶ひて、い
かめしきまでそよぎたち、豆も貰人の折
すぐさねば、せみの小川の影ならずとも、
月も此軒をたつねずやはあらむ。十日驅
馳のさはがしきも一日の閑にとりかへし
て、これだに治世の住よきをしるにも、
おはさぬ人のいかでかと、あかすたゞ口
おしく、忍ぶ草の忘れず、へだちゆく
あとのみおしまるれば、額に無待の二字
を書しも、たゞこの心に思ひよれるを、
いさほとゝぎす我なうとみそとぞ。

斷酒辨

もとより李杜が酒腸もなければ、上戸の
目には下戸なりといへども、下戸なる人
には上戸ともいはれて酒に剛應の座をわ

かてば、おのづからのむ人のかたにかす
まへられて、南郭が竿をふきけるほども、
思へば四十の年にもちかし。されば衆人
みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしら
ず。まして五十にして非を知りしとか、
かしこきためしにはたぐひも似ず。近き
頃いたまじう酒のあたりけるまゝに、藻
にすむ虫と思ひたつ事ありて、試に一月
の飲をたてば、身はなら柴の木下戸とな
りて、花のあした月の夕べ、かくてもあ
られけるものをと、はじめて夢のさめし
心ぞする。けふより春の蝶の醉心をわす
れ、秋のもみちも茶の下にたきて、長下戸
の樂に老を待べし。さもあれ此誓ひ、み
たらし川に御祓もせねば、たとへ八仙の
一座なりとも、まねかば柳の青眼に交り、
吸物さかなは人よりもあらして、おなじ
酔郷にあそぶべくば、いさ松の尾の山か
らすも、月にはもとのうかれ仲まと思ふ

べし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり

物忘翁傳

わすれ草生ふる住よしのあたりに、住わ
びたる物わすれの翁あり。さは健忘な
どいへる病の筋にはあらで、只身のおろ
かに生れつきて、物覺のおろそかなるに
ぞありける。昔は經學の道をもとひき、
作文和歌の席などにもさそふ人あればま
じらひけれど、きく事習ふ事のさすがに
面白しと思ふ物から、夕べに覺しことご
とも、朝ほらけにはこぎ行舟の跡なくて、
身にも心にもこの事すくなし。されば
是を書付置むと、しめて視ならし机によ
れば、春の日はてふ鳥に心うかれて過、
秋の夜は虫なきていとねぶたし。かくて
ぞ老曾の森の草、かりそめの人のやくそ
くも、小指を結び手のひらにしるしても、

行水の數かくはかなさ、人もわらひても罪ゆるしつべし。さればその翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きにかすまへられしほどは、人やりならずはづかしかりしが、つんぼうの雷にさはがず、座當の蛇におどろかざるこほれ幸なきにもあらず。よのつねきゝわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板かへしといふ咄ありて、

またかの例の大坂陣かと、若き人ゝはつきじろひて小便にもたつが中にも、我は

何がし僧正のほとゝぎすならねど、きくたびにめづらしければ、けにときくかひある翁かなと、かたる人は心ゆきても思ふべし。ましてつね々手馴古せし文章物がたりの双帯も、去年見しことはことし覺えず、春よみしふみは秋たどくしく、又もくりかへしみる時は、只あらたなる文にむかふ心地して、あかず幾たび

も面白ければ、わづか兩三帙の書籍ありて、心のたのしみさらに盡る事なし。むかし炎天に腹をさらしたるおのこは、人にもおりく物をとはれて、とりまがはじいひたがへじと、いかにかしましき心かしけん、今は中々うれしき物わすれかなとぞいひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をかとりけるならむ。

わすれてはうちなげかるゝたべかなと

物覚えよき人はよみしか

妖物論

世にばけ物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、さかやきそりたるはつるに聞かす。夜るばかり出るはいかなるゆへぞと、或人の問たるに、晝は例の子供のたかりてわづらはしさにと答たるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病ものを相手に

とれば、その藝ことに出来榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のあやまちをかふむる。鬼は伯母に化てかひなをとりにかへし、狐は叔父にばけて良の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化たらんは、その姿おかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落て、猶また河童はたまぐの沙汰なれども、その正躰の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。

たと理屈なきばけ物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そもく神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此ばけ物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表帯の小双紙にはづかしき姿はとどめられける。さらに昔今の美婦園色すら身の終はみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣

にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見たてもうるさきに、ただこの物の終ばかり引幕の陰をもたのまず、あとに簾も雜巾もいらす、かきけすやうに失にけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

右の文章、草保の初より寛保の頃まで、半插畫著述の遺稿也。

張藩 六林 校

題鵝衣後
也有翁は風雅の隠

君子なり。予に莫
逆の交を許され、

つねに教をうくる

事あつし。爰にま

た東都の四方先生

あり。予はるかに

その芳名を慕ふ事

久し。然るに此う

づら衣は、翁少壯

より老に至るまで

生涯四時の不斷着

なりき。簞笥にお

さめてかくし置、

むざと人にはあた

えざりしを、東都

の先生いかにして

か聞つけられけむ

ある人にことつて

て、その地合染色

をも見ばやの望あ

り。翁生前傾蓋は

あらざれども、高

題鵝衣後

やある風雅の隠君子あり予に莫逆の

交を許されつねに教をうくる事あり

爰にまた東都の四方先生あり予はるかに

その芳名を慕ふ事久し然るに此うづら衣は

翁少壯より老に至るまで生涯四時の不斷着

なりき簞笥におさめてかくし置むざと人にはあた

えざりしを東都の先生いかにしてか聞つけられけむ

ある人にことつててその地合染色をも見ばやの望あり

翁生前傾蓋はあらざれども高

山流水の音しる人
また外にやはある
と、前津の舊庵へ
かけ込て、そこを
守れる文樵なる男
に、さびたる鍵と
らせて、押入れの
引出しをさがし、
文匣の底ふるひて
あまたの中にゑり
垢のつかぬを、か
れこれと撰出し、
速にこれを贈れり
日あらずして梓に
上せられ、遠近の
好士に一襲ツ、衣
配せばやとの沙汰
あり。誠に翁に於
て隔世の知音とい
ふべし。さぞな泉
下にも雀躍して歡
喜あらむ。そも四
方先生の高誼は海
内みなしる所なり

あゝささしとこふ流水の音ある人また外に
やあゝささしとこふ流水の音ある人また外に
文樵ある男あるささしとこふ流水の音ある人また外に
引出しをさがし文匣の底ふるひてあまたの
中より垢のつかぬをかれこれと撰出し速に
梓に上せられ遠近の好士に一襲ツ衣配せば
やとの沙汰あり誠に翁に於て隔世の知音とい
ふべしさぞな泉下にも雀躍して歡喜あらむ
そも四方先生の高誼は海内みなしる所なり

也有翁のうへは、
さきに發句集のは
しにつたなき筆を
そえぬれば、かた
く爰に贅せず。
たゞ四方先生の此
一舉をふかく感じ
て、聊そのあらま
しを附するのみ。

天明五年乙巳

師走の下旬

護花閣 六林識

さきより集のけしきつゝあきまると
あねいゝくゝあき贅せしゝて日先
此一舉とすゝ感ゝ聊をぬあゝを附
さるゝ

天明五年乙巳師走の下旬

護花閣 六林識



うづら衣

續編

煙草説

夜道の旅のねぶたきとて腰に茶瓶も提られず、秋の寢覺の淋しきとて棚の餅にも手のとどかねば、只この煙草の友となるこそ、琴詩酒の三ツにもまさるべけれ。埃のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝ねの目ざましにて、行燈に首延したるは小侍従が待宵ならむ。達摩は九年の壁にむかひて炭國の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を樂む。されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅元さじと吸たる、少し心つかひすらんを、

船頭の短きせるは、舳さきに匍匐て、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ。やごとなき座敷に緞子張の煙草盆をあたま數に引わたしたるより、路次の待合に吸口包たるは、にくからぬ風流なれど、さすがに辭義合に手間も取べし。只木がらしの松陰に駕立て、繼ぎせる取まはせば、茶屋の隣のさし心得て、炮からに薬火もりてさし出したる、一瓢千金のたとへも此時をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、烟打のきせるにがん首さしあはせて一ぶく吸付たる心こそ、漂母が飯の情よりうれしさはまさるめ。そも煙草の徳もむかしより人のかぞへ古して、今さらいふもくどければ、かつのもじや、いせの薦野なる山にいてゆ

薦野記

情實儀をうしなはざれとなり。

あり。年ごろなやめる痼疾にこゝろみむ
とて思ひたつ。頃は七月の廿日あまり、
尾城を舟出して桑名にいたる。あさけ川
といへるより道わかれてかの山へむか
ふ。

鳴たゞば夕べはいかにあさけ川
その末は人家もまばらに、薄はまねけど
酒屋もなく、餅は萩の花の名のみして、
秋草のやさしく咲みだれたる、こゝを繪
野とはいふなるよし。

誰すてゝ扇の繪野の花づくし
山口といへる一つ家ありて菓子などう
る。店に尻かけて。

こだまより外隣なき砦かな
それよりはけはしき道細く、あやうき岩
をつたひ、谷をわたりて、雲より雲にわ
け入れば、世の外遠くへだゝる心地して、
さてはしつけき山の中にこそと思ひやり
しには似もやらず、湯本の家はわづか二

十にたらねど、二階つくりの家居つきつ
きしく、古市などいへるあたりより、たは
れ女多く来り居りて、糸竹に客をなぐさ
むれば、小哥淨る理山とよむばかり、峯の
松風も三線に音をうばゝれ、清き谷水も
暗水のけがれに濁るべきぞ、思ひし外の

山里には有ける。今年はことに湯入の多
くて、いよの湯けたもよみつくすまじく、
近き頃にすぐれたりと、所の人もいふめ
り。わか／＼しきかたは心にもとまらず、

あたらし里の秋の夕をと、ほるたがひた
る心地するが、もと見し事どものさすが
に思ひ出らるゝ折もありて、むかし忍ぶ
の家の名も橋屋といへるに、しばしのや
どりとめて居れり。櫛一重へだてゝ、
ことにぎはしく諷ひさはぐに、

色鳥のねぐら隣や山がらす
日ゝの口號、
湯の山やにしきに交る染ゆかた

暮は湯にゆづりて秋の櫻かな
山の上に薬師堂あり。三岳寺と名のみこ
と／＼しく、回祿ありける後はかたばか
りにいとなみて、すめる僧もなく、明く
れかねつくは堂守の男にて、法師にはあ
らざりけり。

鐘つみや剃らぬあたまに散柳
六日ばかりの月山のはにかゝりて、風も
湯あがりの身にしむばかり、端居の夕べ
おかしきに、鹿の聲遠く聞つけぬ。

笛にせぬ湯下駄にもよるか鹿の聲
つれ／＼まぎるゝかたなき日は、そこら
みめぐり侍るに、大石と名に立るあり。
友寮して猿と月みむ石の上
青瀧といへる、うしろの山をへだてゝ西
より落る。

青瀧や豎に音きく初あらし
この山下にあやしき野火あり、人の亡魂
とかいひつたふ。

たが魂ぞはたるともならで秋の風

是に賛して、

我名もつゝみ人の名もとはねど、をのつから見なれ、ものいひかはして、いざたまへ、けふは花火あけてなぐさまむ、あまごといへる魚とりになごさそふ人ゝもあるが中に、ことに明くれとひ來りし覺樹といへる若き僧あり。下手なる象戲などさして、淋しさまぎるゝたつきともなれり。過る日數も二廻りばかり、今はとてかへる日は雨にふられて、

酒に待茶に待かへて月二夜といへるは、その友紫隱里の某がもとのに應ずるなり。

贈ニ奥州株人辭

朱説の茶由を記て、株人蒲伯に贈する辭に代ふ。

世には芦垣の間ちかき軒をならべてだに、心あはぬどちは音づれもせぬならひなるを、遠き陸奥の見もしらぬもとより、一句を添てかの地の産なるよし、さゝやかなる硯を贈り給りぬ。あやし、しのぶ文字摺たれならん、我ならなくに人たがへもやと、その便せし風水翁にとへば、その國に名たゝる驛客島庵主の何がしとや。かの翁のたび寐に、いかなる序か我名もらし給へるより、そは俳門の友なりとて寄せ給へりとぞ。されば我及ばぬ此道に心入れてより、蕉門の人としきけば、皆十年の舊相知のごとく思へるが、さて

は我ならでもかゝるものならひにやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠の荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

ためしなき雁に重荷やすより石いでや、このなさけのかきけつまじくば、松の烟の黒からむよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅のちぎりもたへざれとぞ。朱硯にまづ手染せむ窓の薦そもや芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引ざる國もなきが中に、奥羽は行脚のはじめにて、奥の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に残れば、ことにゆかしきくまぐも多し。さるを仕官にはだされて、雄島の笛やまたも來てみると、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず、千

湯にぬれし袂の果や秋の雨かばかりの事も、後の思ひ出にもやと書つけ侍る。頃は乙亥の年になん有ける。

(乙亥は實曆五年也)

樂老庵主像贊

滄浪の月すめらば酒におしむべし、くもらば茶に遊ぶべしと、二つの間になぐさむは樂老庵のあるじなり。これを念がき、

は我ならでもかゝるものならひにやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠の荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

ためしなき雁に重荷やすより石いでや、このなさけのかきけつまじくば、松の烟の黒からむよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅のちぎりもたへざれとぞ。朱硯にまづ手染せむ窓の薦そもや芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引ざる國もなきが中に、奥羽は行脚のはじめにて、奥の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に残れば、ことにゆかしきくまぐも多し。さるを仕官にはだされて、雄島の笛やまたも來てみると、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず、千

ひろの海も浅からむ。されば能因の一首を思ひて、一句はその人にゆかしさを告るならし。

しら川や夢にこす夜も秋の風

一色亭記

豆州熱海に旅居の時、渡邊左衛門といふもの、まだよけて記す。

沂に浴し詠じてかへらむとねがひし彌生の空にはあらで、秋もわた入の羽おりきる頃、此あたみの湯本に一月ばかりのやどりする事あり。さは我國君の母公にしたがひまいらせて、身のためならぬ旅寐ながら、舊病幸の折を得て、疝氣の腰を温泉に浴し、浮世の耳を澗水に洗ふ。されば此里の地理、うしろに山かこみ、海はもとより波こもとによせて、月の寐覺に枕を支ふれば、鹿の妻乞巴峽の猿にまさり、雨のつれ／＼に盃をとれば、鰯の刺身、松江の鱸に耻ず。伊豆の於山、まな鶴が崎、久かたの日かね山、朝もよ

ひ紀僧正の宮、眺て吟魂をなぐさめ、歩いて舊迹をたづぬ。沖の小島は朝夕にみればこそあれ、大島はやゝ波路へだまり、雲晴てあらはれ、霧わたりてかくすも、けにくまなきをのみ見るものかとはと、えならぬ眺望いひ盡すべからず。しかれば家ごとくに東面をひらき、湯入の客の目よりこぼすが中に、渡邊氏が亭にぞ、わきてたよりよき樓はかまえり。むかし佐文山こゝに來けるついで、三字の額に筆をぬらせしより、一色亭の名によべるは藤王閣の趣なりとや。落霞孤鶩と齊しく飛び、その長天と共なる海づらの秋も、今にして浦のみるめ、軒端にさはるかたなく、心あるあまの庇のわざと荒してとよみけむには事かはりて、家居もことにつき／＼しければ、たちよる人もこゝをせに、先やとりとる事にぞ有ける。

心ありて荒さぬ軒に浦の月

乞食畫贊

もとより小町が身の果にもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず、君よく是を忘れずば、厨に肥肉を遠ざけて仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よくこれを忘れずば、つねに飽溫の恩澤を省て、報國の志もいかでかこゝに起らざらむ。ちかく治世の明くれとても、これを見かれをおもひしらは、花に一盃の望は足りやすく、雪に鰻汁の奢やむべきをや。あはれ世の人心、蟹の目のうへにのみつきて、猿の手の及ばぬかたにのぼすらんを、あが佛を香華にまほりて、その黄金の肌を羨むよりは、たゞよしこれを起居に詠て、薦一枚を忘れざらむにはと、みづから坐右に畫贊す。

十六夜賦

いざよひの月みむと、勢(無ッ)田濁に

呼つぎの名にいざよひの月見かな

も、我は笑はむと思へるなりけり。

蝶翁傳

三日月堂記

藤二大曾撰成就院書

舟よそひするに、何がしがあるじまうけして、世帯道具もとほしからず。巨口細鱗もまないたにひるがへれば、斗酒はもとより坡翁が妻の才覺もからず。海老煮る間も漕はなれて、くまなき月の海づらにのほれば、こよひや星崎の千鳥も月みよとは啼ならん。いでや其翁も湖水にけふのかけをめで、成秀が門^{かど}蔽^{かき}給ひしとか。むかしかどみの山こそなけれ、呼續の濱松風の里、波のみるめもまよふばかり、西湖江湖の秋風も、今宵はこゝに吹ざらむやと、酒ににぎはし茶にさばして、やゝ清興を高ふれば、まして鳴海瀉夜寒寐覺の里の名に歌よむ人は、衣かたしき物思ひがほなるを、いざや宮こんにやくの寂しみこそと、例の唐がらしのいらひどきに、戀ならぬ袂をぬらして、又一盃をあらたむれば、白鳥山の鐘の聲、おどろくばかりにぞ更わたりける。

蝶といふ虫は、よく飛べども家を過る事あたはず、よくのほれども木を窮る事あたはず、よく穴^{あな}ほれども谷を渡る事あたはず、よく走れども人を免るゝ事あたはず。是をかれが五能ありて、一ツをもなさずとはいへりとぞ。こゝに翁あり、詩つくれども詩ならず、歌よめども歌に似ず、物かけどもよからず、繪かけどもつたなく俳諧すれども下手なり。我かの虫におとらめやとて、みづから蝶翁とぞ名のりける。やゝ老にたり、今はかゝる身のほどをしりて、他にはめられむ事をねがはず、人の謗をいとはず。さらば何に歎も腹たてゝ、かのつぐみといふ鳥にはよろこばるべき。よし、たゞかれは腹たつべくと

そもや故人の手にならせし調度、筆にのこせる跡は、もとよりめでたきかたみなれど、世に露霜もをきかはれば、あるはうせ、あるはそこねて、にせかまことかのうたがひもむづかし。只よし人のことはばかりこそ、代ゝにむしばまぬたからとはいふべけれ。されば翁も一生の吟、いづくはあれど、此府下にしては、何がし院のかへるさにとさして、其寺のまざれざるは、たゞ爰に此一句のみならん。猶その詠し物の上にいはいど、かの武隈の松も跡なく、井出の歎冬六浦のみちも今はむなしき名ばかりなるを、たうとくも此寺にいにしへの月そのまゝに有て、眺望もまた世にこえたれば、昔をしたひ道ののぶ人の、たれかはこゝに來てあふが

ざるべき。さるを五條房のぬし、朽せぬ
印をたて、院主また堂に名づけて此句の
光いやましにかゝけしより、雲上の鴈も
水底の魚も、弓と驚かず、鉤とうたがは
ず。まして舟とも驚とも、一度たとへて
二度目は古ければ、たゞ三日月の三日月
なるそのかは世々にははらずして、い
つも此寺に限なからむとぞ。

猿の手に摩つともつきじ三日の月

翁像贊

道は古池の吟にひらけつ、吟は枯野の
夢におはりぬ。檜の木は月の笠ならねど
も、影を風雅の世にあふぐらむ。

音曲説

今様朗詠といへる、むかしは遊びの最上
にてや有けむ。かの催馬樂などいふもの
は、我つるにきける事もなし。たま／＼

幸若が家に、舞といふ事のかすかにのこ
れるもめづらしとて、一度は人の聞もす
べし、二度と聞べしとも覺えず。いまは
謡といふもの、上中のもてあそびとなり
て、はなはだ下へは至らず、法制そなは
り、老若のさかひなく、古今に變なし。

されば是を玩ぶは人品よろしきかたにさ
だまりて、たとへ商人のよきゝぬ着たら
んほどのきは、高砂東北をもしらぬは、
玉ならでも盃の底なき心地ぞする。世に
さるべき饗應の席へは、その職なる人め
し出されて、小袖と上下の紋は定らねど
も、時ならぬ足袋はきたるは、ひとさし
も心得たるなるべし。一座のさし合、折
からの文句には心づかひして、いかで盃
の間をぬかさじと眼を配りたるなど、扇
は膝の上に斜なり。あるは亂酒の打やは
らぎて、やごとなきかたよりも上調子に
聲打いで給へるに、やがて一座聲をあは

せて、中にも手鼓の心得たるなど、蟬の
ごとく蛙に似たり。かゝる中にたま／＼
その道心得ぬ人は、炙物にせゝり箸して
うちそむきたるは口おしと思ふらむ。

しかるにはれがましき舞臺の面に、眞貌
に足拍子ふんで、辯財天とはわが事なり
とは、まことに仁躰にも似あはず、あま
りなる事と思へば、すこしかたはらい
くおほゆる折もありけり。

されば世うつり、人の耳も心もたゞ向上
にはしりて、淨ろりといふものは洒落の
はじまりにてやありけん。夫だに五十年
のむかしは、さてもそのうち弓とり一人
おはしましてと、一部を發端に名のり、
みだい姫君の道行もたゞこゝに哀をとど
めしに、今世は年々月々に新奇をあらそ
ひ、義理に虚實の入組で、二重どきの謎
よりはむづかしく、不飲込なる老人の耳
には、善も惡もおほろ／＼として、三段

目の愁には、あたりの顔を詠わたしてただ泣より外の事ぞなき。是をもてあそぶ人の、外の音曲とはふりかはりて、本ひかへたるは上手めき、そらにかたるは心おとりぞする。日待庚申にもつばらにして、燭臺の陰に衣紋かきつくろひ、翠簾あるかたを側目にかけて、こはづくりたるよそほひ、やゝ三重の間に息つきて、けしきばかり汗のごひ、湯をのみたる様よかりけりなど、人のつきじろひたるけはひ、世にある思ひ出かくこそなど、若きはうらやむ心もあらむに、よく其人の上をきけば、多くは兄に見かぎられ、親の勸當も少からず、養子縁組の相談には少々はまるかたも有ぬべし。きはめて工商の間にありて、年も三十ばかりまでのわざなるべし。

歌とはすべたる名目なるべけれど、今をのづから筋わかれて、其品また貴賤の異なるあり。古今も一樣ならず。琴の組などは上代のまゝにて不易の眞なり。今三線にあやどるたぐひは、流行しはらくもとどまらず、文句も百端に、音節さだまりなし。本調子は、たとへば女のさけ髪にうちかけしたるごとく、二上りは髪當流にとりあけ、姿もひとつまへにみだれた。三下りはしづまりたるに似たれど、かくし化粧にしごき帯したるよそほひ、物思ふ人はこゝに涙をも落して、中々淫奔の媒とはなりぬべし。すこしも品あがりたる人は、耳にこれをなぐさめども、みづから口には弄しがたし。やゝさだ過たる身の上には、猶にけなくてうたふべくもあらず。かの牛の角を敲きて田のあせにうたひ、あじか荷ひの一ふしは、今も月夜の門過がてには、さるたぐひもあるべきか。缺を弾じてうたひしなどは、おとなけなくもなかりしにや。いさもろ

こしの事はしらぬ風俗なり。たゞ糸によるものならなくに、賤の男賤の女のうへにこそ、歌はすてがたき哀ぞ多かる。舟歌はめでたく祝ひていさましき物から、漁歌の棹歌のと古人のいへるは、波間声間のさびしさにて、是にてはあらざるべし。山更に幽なるに樵の歌のきこへたるは、伐木の丁ゝたるよりもまさり、あけ野が原にすみれ咲て、比丘尼のうたのなめけなるより、さよの中山夜ふかき露わけて、馬かたの欠まじりにうち出たる一ふしぞ、楚客の魂たゞこゝにくだけぬべし。田うへ歌麥歌曰挽うた水汲うた、いさゝか折ゝにたがひありて、所々に品ことなり。いづれが哀ならざるべき。和歌にはさして稱せざれども、詩客俳人多くはこれに情を託せり。

平家といふもの有て、まづは琵琶法師の家にのみ傳れども、はやりうたのはなや

かなるにも似ず、せつきやうの哀なるにも似ず、舞のすたれたるにも似ず、淨るりのあらたなるにも似ず、すかぬ人は甚すかず、すく人はことにすけり。我に友あり。其人のいへる、稍老になん／＼として、かの音曲の品々、一ツも身の上に唱がたし。されば此平家は、こと／＼く信すべからねども、和朝の記録にして、懷舊覽古の情ふかく、諺のねからつくり事なるにはまされり。老ては人のまじはりうとく、獨居がちにかきこもりたらむには、こそ三の友の一にはたりぬべけれど、かの無紋にあらぬ一面の琵琶を抱いて、雨の日、月の夜、官務の際に搔なせば、人はたゞ平家を習ふとや見るらん。

我はひそかに老隠の稽古をするなりといへり。さればかの琵琶も母かたの祖父よりつたへたれば、たゆまじき糸筋なめり。撥面に三日ばかりの月さし出て、桐の一

葉の散たれば、新涼とはよぶ事とぞ。これにさびしからむ句ひとつとこふまゝに、膝瘦て琵琶のなづきや秋の暮

知雨亭記

市中はなほだ遠からねば、杖頭に錢をかけて酒を除る足を勞せず、市中また近からねば、窓底に枕を支へて夢を求る耳靜なり。こゝに少の地を求めて、聊膝を容るの幽居をいとなむ。よしかの鬼はわらひもすらん、我世のあらましがふまじくば、花とならびの岡ならずも、有とだにしられてぞ老の春をも過ぎばやと、人しれず思へるなりけり。かの山雀の身のほど隠して、四壁たゞ風をふせぎ、三徑わづかに草を拂ふ。こゝに波べき山の井なれば、井戸ひとつこそ過分のたくはへなれ。あたりは夕がほの小家がちなれば、枕に鶏の曉を告げ、夜はとがむる犬も聲

して、ひたすらとをきほどにもあらず。門を出て東北の方しばらく十歩の杖を曳けば、指頭万疊の山横おれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高くらの森高く、鳴海の浦風も通へばや、勢(熱)田潟も名のみして、夏は夏しらぬ日も多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも細りて、衣うつ聲虫の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。年くれ年かへり、垣ねの梅は遅からねども、万歳鳥追などいふものゝ、うき世の春には一日二日も立おくれたるなど、さすがに片里めきたり。されば名付て知雨亭とよぶ事、かの蘇氏が喜雨にも習はらず、何がし黃門のしぐれをも追はず、只これ穴居に似たればなり。やゝ多病の老にともなひ、しげきことはさに物ぐさなるには、あはれ思ひし儼なるを、我は心ゆきて覺ゆるを、こゝもまた府城の辰

已なれば、世をうち山と人はいふらんかも。

百魚譜

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口をける、をのがさまゝなる物ずきはあれども、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。糸かけて臺に居たる男ぶりさへ、外に似るべくもなし。しかるをもうこしには、いかにしてかことに賞翫の沙汰も聞へず、是に乗ける仙人もなし。されば夷三郎殿も他の蕪武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龍を鯛の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さは是を料理せんと學びたる人は、むかし愚なる名をもこそとどめたる。

龍門瀧にのほらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも此名をからせ給

へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ば

むとす。かれはいかなる幸にかあらむ。

味ひ美なりといへども、鯛の料理の品、

なるにはにるべくもなし。乾物炙物にせ

ず、^{清汁} 給すましによろしからず、くすし蒲

鉾に用ひがたく、塩にも鰯にも調ぜず、

只さし身あつ物にとどまるは、多能を耻

といひけんを、中々ほまれと思へるにや。

昔平家に惡七兵衛景清と名乗て、今民間

には泣子をも感すべく、朝比奈辨慶に肩

をならべんとす。しかるに記録の上にし

ては、^{朝比奈} ころ曳の外はさせる働なくて、

只二郎兵衛も五郎兵衛もおなじつらなる

侍なり。いかに世に名のことゝしきぞ

と、ある人評したるものあり。かれたゞ

七兵衛が類なるべし。

松江の名産、我朝にも品くだらず。張氏

は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は

是を船中に得て官路に進む。進退いづれ

をかうらやむべき。

鮎は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に

似て位階おとれり。名には紅葉をかざし

たれど、鮎は春の賞翫となれり。

鮎は節饗の頃もてはやされ、梅咲ころを

世に匂ふ。

鮎は初秋に祝はれて、空也の蓮のはに登

るは、後生善處の契もたのものし。

鮎は芥子鉾(酢)の風味、上戸は千金に

かへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性

を兼好にいひさがされたる、いと口おし。

鯉節となりては木の端のやふにも思はれ

ず。その梢とも見えずして、花の名をさ

へ世にちらしぬる。

鮎鱗の唐めきて子細らしきに、つるし切

とはいふせくして、桀紂が料理めきたり。

かれは本汁にゑられ、鱈はかならず二

の汁の大將にて、捌手をぞうけ給りぬ。

もしは文字の理屈によらば、紫の上には

鯉^{こい}をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鯉をやめさせ給ひけん。

鯉は越路に名ありて其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染て、うるはしく照たるこそいみじけれ。たま／＼鯉といふものも、その色はまけじとやいどむらんを。狭夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非情となり、これは非情の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝万葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものゝ世にもてはやさるゝは、かの鯛鯉の太魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊とも、しろ鷺ともいはねば、しら

魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出て、いなとよ世にしら猫とも、しら鼠ともいふにこそとうちこまれ、爰に物定の博士ししばらく黙然たり。鯉は鶴川の篝火に責られ、鯉は濁江の瓢單^{ひょうだん}（筆）におさへらる。比目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。齒にもたまらぬぬい^{ぬい}の骨は、何の爲に持たるや。それも海月のなきにはまされるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入てとらるゝこそ感なれ。那智の瀧壺ならば、文藝が行力をも傳ふべきを、一休の口にははめられながら、まさな法師の身の果かな。かながしらといふ名のめでたくてぞ、産屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものゝ、かね持^{かねもち}ともいはず、世にいかばかりもてなされむを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。

鯉^{こい}さよりは、をさなき心地ぞする。大男の髭口そらしてくふべきとも覺えず。

鯉はたゞ釣る頃の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便よき人は、まだき新蕎麥喰たりなどほめかされて、うらやましき頃ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐がらしくはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰らんとさへ覺束なし。

鰻とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、あやしき毒をもたりけむ。その味ひと藍の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鯛といふものゝ味ひとすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故にいやしまる。たとへば田嶋のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下

の鬼を防ぐ。其功、鯨鮪も及ぶべからず。
されば歌人は鳥虫に四季をわかつて、魚
に四時の題詠はなし。俳人兼て魚を品題
とするは、もつばら味ひの賞瓶を捨ざる
故なり。しかれば歌よみは耳目の愛にと
どまりて、食は野卑なりととらざるに
似たれど、かの喰ふべき若菜をもつばら
によみて、菜の花のうつくしきを歌の沙
汰に及ばぬは、喰れぬ故によまざるにや、
無下に口惜しと人のいひたる、さがなき
詞ながらおかしかりけり。

案山子辭

もるとせしおくてのいな葉刈はてゝ、山
田の畔にひとりたてるかゝしあり。むれ
わたるいな雀の落穂ひろひけるが、例の
口さがなくてわらひけるは、養由は百歩
に柳のはをはづさず、養家は鳴弦を雲の
うへにひよかせ、頼政は鵲を射る。その

外武將名士の弓箭に功ある、みなその藝
を發して世に名をふるへり。なんぞや、
あやし竹に繩はりて、射る事しらぬ弓
の形をいつはり、我輩をあざむかんとす
るや。案山子これにこたへていふ。ひか
ぬき放さぬ矢にて射る時は中らずしかも
はづれざりけり、とよみける歌の心をし
らすや。その奥州の鳴弦も、矢は放さず
して徳をあらはせり。鱗は角をそなへた
れども、肉ありて物をやぶらず。むかし
忠盛の闇討も、木太刀に身の難をのがれ
てこそ、かしこしと人にははめられつれ。
しるて物をやぶりそこなひて後その功を
なさむとするは、愚將のなす所なり。い
でやかの鵬といふ鳥を聞けるや。九万里
に羽うつて翼垂天の雲のごとし。おどり
はねて穂ひろふ汝らが、よくその心をし
る所にあらず。いかで我をみづくに類
して、みだりに笑はんとするや。雀なを
も口々にいふ。さればその大鵬の雲に羽
うつは、莊子の例の大嘘にして、斥鴳の
よもぎふに飛ぶは、今見る所の實なり。
たゞその實を以ていはむ。世に鶴といへ
るものに、千とせの齡はことぶかるれ
ども、今は是を取て大變に屠られ、羽は
矢にはがれ、殻は黒やきにして、何かれ
の藥とて争ひ求めらる。鷹はこれらをも
組織て、其功上に出るに似たれども、そ
の藝のすぐれたる故に、朝三暮四の餌を
あてがはれ、足をつながれ、架にほださ
れて、雲をこふの愁をまぬかれず。しか
じ、世中の人には葛の松原に一枝のねぐ
ら求て、淺茅が露にかくれやすからむに
は。そもや汝が身にあきはてゝ、稻くき
已に霜寒し。などや五湖に棹さして、簞
笠の座をはらはざるや。他をそしり我を
しらざるは、共にいふべからず。昔うぐ
ひすは歌をよみたれども、それは花に啼

ぬめりなりとて、

捨時をしらぬ案山子の弓矢かな
と轉りて去らむとす。案山子猶よびと
めて、汝かしこきに似て又わが心をし
らず。そも笠を誘ふや簾をそしるや。其句の
返しにはあらず、たゞ此歌をきけとてよ
みける。

是は笠これは蓑とてのけたれば
あとには何かかゝしなるらむ

糸瓜辭

むくつけきふくべも、ひさごといへば、
伏猪のやさしみあり。花はまして夕がほ
の人めきてよそほへるを、此ものゝへつ
らはす、うき世をへちまと名のりけるよ
り、源氏の御目もとどまらず。まして歌
よみは此名にもてあつかひて、こちらの料
理にはつかはれずとて、ほかからし捨て
るを、やがて俳諧師のひろひとりて、己が

垣ねには遣せたるなり。その味ひの美な
らねば、鴉もぬすまず蟻もせゝらず、鉢
坊主もみかへらねば、隣の人をもうたが
はず。

草刈のそしるをきけば糸瓜かな
猶又いみじき疝氣の藥なりとて、ことに
此翁の愛するにぞありける。むかし水の
流に光さして、楊柳觀音のあり所はしら
れ、栗栖野の柑子には、きたなきあるじ
の心をさへしられつ。白壁のらく書には、
醫者の家なる事もしらるべし。されば色
をも香をもしらざればしらず、しる人は
しりぬるかし。

百蟲譜

垣にへちまさてはあるじも疝氣持
てふの花に飛びかひたる、やさしきもの
のかぎりなるべし。それも啼音の愛なけ
れば、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めで

たけれ。さてこそ莊周が夢も此物には託
しけれ。只とんほうのみこそ、かれには
やゝ並ぶらめど、糸につながら鏝にさゝ
れて、童のもてあそびとなるたにくるし
きを、あほうの鼻毛につながらゝとは、
いと口おしき諺かな。美人の眉にたとへ
たる蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれて
こそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我
子となす、老の行衛をかゝらんとにもあ
らず。何を護むとてかくはほね折るや。
我に似よゝとは、いかにをのが身を思
ひあがれるにかあらむ。花に狂するとは
詩人の稱にして、歌にはさしもよまず。
蜜をこほして世のためとするはよし。只
人目稀なる藥師堂に大きな巢作りて、
掃除坊主をおびやかさんとす。それも針
なくば人にはにくまれじを。
蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの

部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも謗がたし。

蟬はたゞ五月晴に聞そめたるほどがよきなり。やゝ日さかりに啼さかる頃は、人の汗しほる心地す。されは初蟬とも初かはづともいふ事をきかず。此物ばかり初

せみといはるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えすと、此ものうへは翁の一句に盡たりといふべし。

はたるはたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすたく。

五月の闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせられたるは、此ものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは糞の梢に過て、夕は草に露をく頃ならん。つく／＼ほうしといふせみは、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の謔にいへりけり。哀は蜀魄の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待くれの歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の

始として、頼光をさへおびやかしたる、いとおそろし。さはいへ廢宅の荒たる軒に蟬の羽などかけ捨たるは、いさゝかあはれそふ折もあらんか。かれはかひん／＼しく巢つくりてこそあれ、東海道にちりほひたる宿なし者をば、蜘蛛とはいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものにたとへ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。春むし呑むしは名のみして虫ならず。油むしといふは虫にありてにくまれず、人にありてきはる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とりむしはたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、夢くふむしはふ／＼字衍ナラシ物やきの謗となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉むしはやさしく、こがね虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれる。

編輯 衣らづら

狗の曲に嚙るゝ蚤はたま／＼にして、猿の手にさぐらるゝ虱は、のがるゝ事かたかるべし。

虱を千手観音と呼ぶに、蝨蛭は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、けち／＼が異名なりや、先後今はしりがたし。

蝸牛は只水に有べきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん。家は持たれどもゆく先よを負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇蚯蚓の足なくともあるくべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蠟螂の瘦たるも、斧を持たるはこりより、その心いかつなり。人のうへにも此たぐひはあるべし。

蟹のあゆみにたとふべきものこそなけれ。たと原吉原を、裾にのりて富士を詠めく人には似たり。

促織鈴虫くつむしは、その音の似たるを以て名によべる。松むしの、その木に

もよらで、いかでかく名を付たるならん。

毛生ひむくつけき虫にも同じ名有て、松を枯し人にうとまる。一、在所にふたりの

八兵衛ありて、ひとりとは後生をねがひ、なとりは殺生を事とす。これ松むしのたぐひなるべし。

きり／＼すのつどりさせとは、人のために夜寒をおしへ、藻にすむ虫は我からと、只身の上をなけくらんを、養虫の父よと

呼は、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみこひて、などかは母をしたはざるらん。

蚊はにくむべき限ながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕べ、はじめてはのか

にきゝたらむ、又は長月の比ちからなくのこりたるは、さびしきかたもあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やり焼里の烟など、

かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはけしきを、かの七賢の夜咄には、いか

に團うきの隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとい、花に愛着せし佐國は、

蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花にくるひ月にうかれて、更行行燈の影を

したひ、なら茶の匂ひに音を啼らんこそ哀なるべけれ。

この撰集は、也有錯脱保のすゑより覽照のはじめの頃までの遺稿を以て抄出す。

末僚と、林



うづら衣

後編 上

歎老辭

芭蕉翁は五十一にて世をさり給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も五十二にて一期を終り、見過しにけり末二年の辭世を残せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへこして、今年は五十三の秋も立ぬ。爲頼の中納言の若き人との逃かくれければ、いづくにか身をばよせましとよみて歎かれけんも、やゝ思ひしる身とはなれりけり。さればうき世に立交らんとすれば、なきが多くなりゆきて、松も昔の友

にはあらず。たま／＼一座につらなりて、若き人にもいやがられじと、心かろくうちふるまへども、耳うとくなれば咄も間違ひ、たとへ聞ゆるさゝやきも、當時のはやり詞をしらねば、それは何事何ゆへぞと、根問葉問をむづかしがりて、枕相撲も拳酒も、さはぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只一人火燵蒲團の島守となりて、おむかひがまいりましたと、とはぬに告る人にも、忝しと禮はいへども、何のかたじけなき事あらむ。六十の髭を墨にそめて北國の軍に向ひ、五十の顔におしろいして三ヶの津の舞臺にまじはるも、いづれか老を歎かずやある。歌も淨るりもおとし咄も、昔は今のにまさりしもの

をと、老人ごとに覺えたるは、をのが心の愚なり。物は次第に面白けれども、今のはわれが面白からぬにて、昔は我が面白かりしなり。しかれば人にもうとまれず、我も心のたのしむべき身のをき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老を忘れざれば、しばらくも心たのします。わが身の老を忘るれば、例の人にはいやがられて、あるはにけなき酒色の上にあやまちをも取出てん。されば老はわするべし。又老は忘るべからず。二つの壺まことに得がたしや。今もし蓬萊の店をさがさんに、不老の藥はうり切たり、不死の藥ばかりありといはゞ、たとへ一錢に十袋うるとも、不老をはなれて何かせん。不死はなくとも不老あらば、十日なりとも足ぬべし。神仙不死何事をかなす。たゞ秋風に向て感慨多からむと、菊子訓をそしりしもさる事ぞかし。ねがはくば人はよ

きほどのしまひあらばや。兼好がいひし四十たらずの物すきは、なべてのうへには早過たり。かの稀なりといひし七十まではいかどあるべき。こゝにいさゝかわが物すきをいはど、あたり隣の耳にやからん。とても願のとどくまじきには、不用の長談議、いはぬはいふにまさらんをと、此論こゝに筆を拭ぬ。

四藝賦

琴棋書畫は異國の沙汰なるべく、こゝにあはぬ評ながら、しばらく名をかりて論ぜむに、琴はことさら品の異なるやらむ。かしこにはもつばら隱者閑人のもてあそびにして、十三絃だに所せきに、二十五絃のいそがしきも、いかなる嶺の松風にやかよひけん。さるも無絃の琴を撫て意ありとたのしみけんは、こゝにも上戸の樽のせんを繰で、月みたる咄には似たり

けり。碁にすける人ほどうらやましきはなし。さしむかひたる内の無念想なる、士は金門に腰を折しけさのつかれを忘るれば、貧僧はあすの米櫃のあてなき事を思はず。夏は入日の西に迫りて膝の上までさし入れども、たゞ地を造りはま卷盡してぞ、始て蚊の口のかゆさを覺へ、菓子盆に蟻の付たるを驚く。冬はみづはな^{清涼}の露落て無常を死石の上に觀じ、火燵蒲團に吸物はいつの間にかはこほれけん。たゞかの蟬といふものゝ、をのれなく昔にのみ心を入れ、それをねらふものはうしろに鳥の窺ふをしらぬに似たり。その蟻の斧朽て、七世の孫にあひし時、久しき年月の別ながら、咄すべき事のひとつもなかりけんは、大きな損といふべし。我もとより不機根にて、此樂をしらざるはふかき恨なり。さて手跡のつたなからぬは、ことにあらまほしきわざなり。夫

も上品の人は詩歌文章にのみ筆を染め、書翰もいやしからぬ文藝に、万世の後も名はとどむべし。品下りたる人は日用の事にも用ゆれば、或は文庫の覺書に何処何分何厘、此錢何百何十文と定家やふの筆法もいと口おしく、又は此暮利分ばかりに御了簡偏に頼み奉ると、文微明が跡をのこすもにけなきわざにして、心の外なる事ながら、世わたるならひいかゞはせむ。惡筆兵衛が出るまゝ口に、手は只よめ安きこそ要なるべけれ、たとへ能筆が書たりとて、一字が二字の用もせず、といひたるは、ことはりに似て無下に覺しか。そも又畫ばかり位の品となるはなし。能畫のうへはさらにもいはず、鳥羽繪の男は瘦てさびしく、大津繪の若衆は肥て衰なり。うき世繪は又平に始り、菱川に定り、今西川に盡たるといふべし。旅籠屋の屏風には、けしか牡丹かしれぬ花

啖て、人より大きな雞の、屋のむねにとまりたるこそ目さむるわざなれ。又は數寺のふすまには、遠水に波高く、遠人の目鼻あざやかに、帆かけ舟に乘て跡へ走る、これらも繪にあらずとはいはざるべし。俳諧師の繪は上手下手の沙汰なしとて、翁も跡をのこし給へば、我も我流の筆ぬらしそめて、破れ鍋の畫贅をかけば、綴蓋の望みてありて、こゝかしこにちりほふ。あはれ耻しらぬわざながら、はゞからず書ららずはよしと、吉田の法師を無理なる荷擔人にして、此年頃硯の海にも遊ぶ事にぞありける。

隠居辨

箕山の月は高うして望べからず、五湖の水も深うして窺がたし。垣は紫陌に隣れども、大隱の市にもへだより、蕙は黃稻の陰にまじはれども、小隱の陵數よりも

淺し。されば昔の隱者を思ふに、徳ある人の世にしたふをむづかしがり、仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をまかへ、かたちをも忍びけめ。徳もなく仇もなき人の、たとへ四條五條に金の看板を出したりとも、問べきよしの人こそとはめ、さもなく人は見むきもせざらむ。おさな遊びのかくれんほも、尋る鬼のあればこそあれ。さるをうき世にかくれ顔なるぞ、中／＼はづかしき心地ぞする。いでや世に隠居の二字全からむと、みそかにちかき有明の月さしこめて、門は蕙に閉させ、かりにも人にあはじん／＼とひそまりたむ。さは見事なる隠居ぶりかな。是を社見ならへと、出すりこ木なる隠居をはちしめて、人もよしとはほむるならむ。それは後世にもかたぶきたる人の、あが佛をこらへ力にして、たま／＼たへてもとけぬべし。さもなくて命つれなき人は、朝

ね畫寢のしづか^閑つくしにも飽けば、次第にさびしくくらし杞て、かれはかくいふゆかりあり、これは久しき友なればと、おとづれかはすほどに野中の清水にことよせて、そろ／＼昔をとりかへし、始に似ぬ人もあるべし。花山の上皇もかゝるうき名には立せ給ひたりとか。さるは北山の神靈にもいかられ、俗の諺にはよりがもどけたともいふなりけり。されば物の始にぞ、ゆく末はよく思ひはかるべき事にこそ。そもや我身の上をいはいはど、かしこ陰を頼奉り、官路に立しも久しけれど、もとより毒にも藥にもならねば、人にあかれし身とも覺えず、雨露のめぐみ深くして、すななる國に鬼もなければ、世に人に我もあかず。只病になやまされ、今は弓も引がたく、馬にも乗がたく、さてもものゝふの名にかすまへられんは、南郭が竽を吹けん此身のうへのは

づかしければ、老と病を一荷にして、うき世の關はのがれ出たるなり。しかれば誰をおそれ何を耻て、さのみは逃もかくれもすべき。さりとて又貴顯の門松をくどり、桃に萬蒲に袖ふりはへて、こゝの嫁入かしこの法事にもつらならんは、いと見ぐるしう 官事をさへ辭したれば、い

けば、きのふのうき世よりやかましく、それ又謝せやば有べからずとて、家を尋ね門たゝかせて、物まうに人を驚かし、隠居の禮にいそがしきは、おかしかりける世のさまかな。やいとけに食傷して煩ふ人のたぐひなるべし。

を思ふに、かれは夏あつくこれは冬寒し。けに楊州の鶴はあたまただになかりけり。これを吉田の法師にとへば、冬はいかなる所にもする。あつき頃わるき住居はたへがたしとぞ。是こそ此爲の師なりけれ。誠に頭巾といふものあらざらむや。手水行水にさはるものなく、襟に垢しみす枕に油つかざらむは、心も共に滑かるべし。夏をむねとこそと思ひ定て、つる

剃髮辨

さを押付て隠居よとは、いたみ入たる名目ながら、是非なき世の通稱となりて、行灯挑灯の取ちがへも多勢に無勢叶はねば、益なき事はあらためぬをよしとこそ。過し頃いづくの程にか、市中の門柱に隠居某と書ける家札をみて、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、隠居したる悦とて、したしき限はいふに及ばず、うとき人よにまでとはれて、門前しばらく市め

すべて天地の間その理ありて姿あるべく、すがたありて後名はあるべし。いでや世をのがれてうき世の名をあらためんには、その姿まづあらざらむや。今やさかやきの世間をやめては、神儒の束髪にや似せんと、釋氏の剃髪にやならんと、模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕上なれば、一大事の分別にはありけり。

にうたがふ心もなし。されども儒者の顔付をうかゞへば、あまり機嫌のよからぬは、父母の遺體をとの咎めなるべし。さ

るは一朝の怒に喧嘩を起し、二世の契に心中をくはだて、我とわが身を愛せざる無分別をするなどの道理にさとす教なるべし。それを理屈の十露盤にかけて、分厘までをはじき詰めれば、爪も剪がたく鬚もぬきがたく、鼻毛も蜻蛉のうき名をつなきて、かへつて親をもはづかしめぬべし。その上わが双親世にましませし時、老後は共に剃髪の望もおはせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれをする故に、かつはかの遺體を以て寸志を繼ともいはいふべし。そもまた釋門に此妾の始る事、深き心はいさしらねども、先はうき世のかざりともなれば、これも煩惱の端ぞと拂ひすてゝ、もつばら色のふせぎにもやあらむ。されども今は醫者も連歌師も剃こほして、妻帯はあたまにしもよらず。まして妻こもれる武蔵野の八

貫町には、四部の御弟子の比丘尼をあつめて、比丘も優婆塞も入交れば、頭巾は紫の色ならねど、吉原の朱をも奪んとす。しかれば佛もあたまばかりの目利にて、御弟子帳には書のせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば入道ともいひがたなく、人を教ねば法師にもあらず。禪門でもなし、坊主にもなし。さはいへ世のならひにて字義にはかゝはらず、湯茶ばかりを沸せども、その名は藥罐とよばれ、藥ばかりに用るも、茶碗は茶わんの名をのがれず。されば容のおなじき故に、妖物の見こしも、もが書のへまムシも、蛸とも、よばよぶ人に隨べし。

剃てこそ月にまことの影法師

自名づく説

遁世の妾すでに定りぬ。さてはうき世の

名にもあらじ。さるべき二字にあらためばやと、名を思ひ字をゑらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義をとらむも、跡のまつりとやいふべからむ。よし又四書古文の抜書も、あまねく人の取盡し、まして歸去來のことばなど、あらゆる隱者のむしり取て、骨ばかりに喰ちらしたる。さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問聞む人の、とみに心得ぬ顔の口おしく、ほね折の詮なき心地すれば、これは其書のたが言なりなど。一人／＼に講釋せんは、いとむづかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨運にても有べからず。されば世の人のうへをみるに、金藏といふも貧に賣られ、万吉も不幸のがれず。玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はそ

の人によらぬものかも。よしさらばたゞ
調市^{ツツシ}走女も覺よく、婢も娘もかきやすか
らむをど、此日人のもとへ消息の筆にま
かせて、たゞ暮水とは書はじめける。そ
れだに人の味ひて、これは何の心にて、
それは此語によるならむと、蛇に足をそ
へ、摺小木に耳をもはやして、自然とふ
かき字義にも叶はど、それも又おかし
かりぬべし。

へちまとはへちまに似たで糸瓜哉

鍾馗畫讃

豆をうたぬ家もなし
いづこに鬼をたづぬらん
素人繪の幟にかゝれて
あやめふく軒にひらめく
疫神除の板に押れて
ひいらぎの門をまもる
其劍と摺小木と

つのにまだ鞘を見す

雪請序

ことし前津の里に世をのがれて、秋の月
は心ゆくばかり詠すごしぬ。山野の眺望
くまなきには、雪のけしきのことによか
らむと、我も思ひ人もおもへるにや、雪
の朝は必とひ來んといひし人々もあれど
も、その日の火燵のはなれがたくば、林
下なんぞかつて一人を見むといひし詩の
たぐひならむと、かねてまたるゝ思ひも
なし。木の葉もしぐれもふり盡して、霜
ふり月の半すぐれども、けしきばかりに
のみうち散て、蓑笠に見むまでの雪は猶
つれなし。されば昔より雨を請ふためし
はありて、神泉苑の四ヶ度の祈は、貴僧
高僧の法力をあらそひ、小町が歌は兒女
の謠にのみつたへて、あめが下の理屈に
とがめ、能因の天河は古書にもしるして、

そのことさだかなり。雨は五穀の爲なが
ら、雪も豊年の瑞とこそきけ。そもや雨
を降らす神あらば、雪ふらす神などかな
からむ。歌に感應あらば俳諧にも感なか
らむや。いでやおほけなくも鳥羽院のお
さなくおはして、ふれく粉雪の御いの
いたゞきも一望の内にあれば、半掃菴
に雪乞をせばや。年頃の俳諧もか様の時
の爲にこそあれ。かたぐゝも力をそへて
給はりひへと、ことには不元庵の老和尙
を先達として、好事の連衆をかたひ、
丹誠を抽て一夜火燵の壇をかざり、雪請
の一卷をぞ催しける。

雪の願ひ水にはなしそ夕あらし

臍説

世を捨たる法師の、物くるゝ人をよき友
にかぞへたるは、にけなき心地するに、

けに思へば其庵に一鉢のまうけも暖氣に
さへられ、あつものゝ藪も冬かれては、
物くるゝ友のことにうれしき日もありけ
るか。もしは又くるゝものをよろこばね
ども、くるゝ心の慾なきをよろこぶや。

我はかく世は捨てたれど、かしこきめぐみ
の祿を世ににして、そのかけにやしなは
るれば、もとより凍餒の患はいはず。たゞ
虫干も煤はきも世話なからむ事を思ふに
は、無用のものをたくはへず、うちある
調度も事足るを限として、只一用に物の
多からむをいとひ、一物にして多用なら
むを思ふに、抄子は定規にならざれども、
煙草箱は枕となるべく、頭巾に酒は漉さ
ずとも、火燵のやぐらは足代に足りぬべ
し。そも一物にして多用の省略は、天地
開闢よりその沙汰あり。今見よ鼻は呼吸
をかよはし、物嗅ぐ用を兼ね、口は飲食
をなしながら言語の用をかねたり。天も

し人を尊からしめんとて、二つの鼻をあ
たへ、目を三つ四つも付たらば、因果物
語にのせられて、開帳芝居の見せ物とな
るべし。これ天の長物をとらざる所なり。
又は鼻ばしらを眼鏡の臺とし、耳を笠紐
のたよりとする類は、天の理に則つて聖
人は是をおしゆるもの歟。その中に臍とい
ふものゝ、蓬生のかげにかくれて、表のか
ざりともならず、何の益なき道具にして、
久しく不審の晴ざりしが、今此身にして
はじめてしりぬ、慥に天地開闢の時、餘
義なきかたよりの賁物なるべし。その理
いかにといはん、我かく物の不用をい
とふに、飲でしまひ喰でしまひ、又は遣
ひてのこらぬ料紙やふのものは、うれし
き折もあらんが、さもなく調度のたぐひ、
是は仕出しの風流なり、これは細工の面
白しなどいひて、人のくるゝものあるに

にうれしき顔してもらへば、一つ二つと
物のつもる、いとほむならず思へどもい
かゞはせむ。こゝに世のためしを思へば、
むかし西行の鎌倉にとどめられて、銀の
猫を給りしを、やがて門前の童にうちく
れてざりしとぞ。されば其人の身を思ふ
に、何ぞ王侯にも將軍にもへつらふ心あ
らむや。しかるを猫はいらぬともいひが
たくて、其座は取ていたゞきければこそ
門前までは携へ出けぬ。是をもつて彼を
思ふに、我はまして斗擲の身にもあらず。
わが子の祿に命をかくれば、さすがに人
の心をもやぶりがたし。是たどかの臍と
思へるなりけり。豈臍此理にあらざらむ
や。

弔不幸文

贈六林

君きけや、鳥にあらざれば鳥の心をし
す、魚ならざれば魚の心をしらす。君愛

女を失ひて貫之が涙袖を浸し、長嘯のいたみ襟に満つ。さだめて知る、とぶらふ人々の少物わきまへたるかぎりには、例の天命を説き、哀むでやぶらずなど、して忘愛の物をすゝめ、只あきらめよ忘れよ、と君がもとよりしりたる事をくり言して、うき世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓子籠に長口上をもつらね添らん。いかで饅頭に涙かはかん。何ぞ栗柿に悲をまぎれん。果は出入のうばかゝが懷を高うして、もらひ泣とは是をしもいふにや。是たゞ鳥にして魚を弔ふなり。

我も近き頃十九の愛女を先だてり。されば君が心我よくしりぬ。君又はじめて我を察すべし。我が魚にして魚をいさむ。只なけき給へ。けふも歎きあすもなけき、なけきくてゆくまゝに、なけきの森に秋ふけては、杵の色のうすきをも覺らむ。七々の日の法事には万行の涙千

末、さだめなき露こそかなしけれ。跡の鴈先へとはたが秋のそら

賛補破茶碗辭上

第一つともいふべし。されども節の膳をならべ、桃に雛の祝ひ日には、あらましかばの怨は盡す。盆の踊の手拍子は人しれぬ胸にこたへて、此かなしみは一生の病なりとしり給へ。されば子の親をうしなひてこそ、手ふれし調度目にめでし草木までも、長くとどめてそこなはず、是を見かれにつけて、したふ心を忘れじとはするなれ。今君が歎きたぐひ、世の倒の別なれば、書のこせし筆の跡も鬼となりて引やり捨、手なれしものも火にうちくべて、兒女の態をななし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草をもとめむにはしかず。噫我今先達の顔して君をいさむ。君また先達の顔して、たがあすの身の上をかいさむべき。只あだし野々草のもためく、と、あらたに告て我は火燵の山に

大極の氣二つに破れて陰陽となる。その陰陽の又あふからに、夫婦いもせの契ともなれり。おもしろし。此茶碗のまどかに望月のくまなきのみかはと、一たびわれて有明の盈虚を示し、會者定離を打かへして、離たるものゝ又あふたるぞ、佛も我を拵給ふべき。嚮に此事に文あらむ事を我に求む。我田先生が言にきけり、騏は壯なる時一日に千里をはしる、老ては驚馬も先だつとか。まして驚馬の老たるもの、何のいふ事をかしらむ。そもく是より北にあたつて護花關あり、そこに一人の好事あり、かしこに乞て求むべし。あなかしこ、うたがふ事なかれ。只たのめく、と、あらたに告て我は火燵の山に

かくれぬ。かくてかしこに其文成れり。

始の茶碗のあやまちに懲りて、いかにもそつと敲て見るに、果して金玉の響あり。

噫此茶碗のわれずば此文あらじを。あざ丸の太刀蟬折の笛も、その瑕ありて瑕ならず、繼目をいたむ事なかるべし。婦娥が天上の薬はいさしらず、人間に石うるしといふものなからむや。

はなれたら繼けはなれたらつけ幾度も

破れ世中にあらむかぎり

贈ニ公平菴文

平易を以てわが分とす。たれか是をねがはざらむ。もと此菴只是なれ家にして、呼て餘盃をつくさしむべき垣越の翁もなかりしが、あるじの徳の孤ならぬにや、隣めく軒のこゝかしこに建ならびたるは、よしやとみるらん、むづかしと思ふ。いざあるじの心はしらず。されど東面は

もとのまゝにして、わが庵とても月まつ嶺はおなじ方ながら、廣寒宮への道のりは一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとどめよと乞はるゝに、四時の多景何をかわきていふべき。されど庵ちかきよしみもあればつれなくいなびがたく、只眼前の姿をいふ。

繪の中にうごくものあり

として、下五もじに掛はづしの自由あり。春は田にし取とすべし。夏は早苗取、秋は木わた取、冬は大根引、とをきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、句のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

臍頌

臍を不用の物なりとは、我も誇りし人の數なり。されば他の一寸は見へて、わが

一尺は見へずとか。世にやくなきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれ。そまの臍は物やは食ふ。素餐の誇もなし。さらば物やはいふ。三緘の聲にも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論せば、男の乳ばかりこそ、いかなる益のあるとも見えぬど、今更これらを取り拂はゞ、腹は渾沌王の面かけにして、世にすけなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせんかたなきにも、まづとて是に食する時は、泉下の首途を留るためしも多し。扱こそ腹のさしも草、只たのめともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を抜く力も、此垢を取れば忽に落つとぞ。痛悔臍をかむとは漢文の古語にして、我朝に人を嘲りては臍が笑ふともいへりけり。しかるにつましき隠居ありて、臍がねといふを溜られしより、天津空の鳴神もこのもし

がりて、いかで是抓むとし給ふより、女
ご(こ字衍ナラン) わらべの氣づかふ事
は、麝香の狩人を恐るゝにもこへたり。

むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に
泣年の暮と懷舊の袖をぬらさせしは、
耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅
にも大功あれば、今は我身を何にたとへ
ん。されば臍はわが下に立む事かたくと
も、われも又臍の下といはんは、何とや
らむ場所よからず。かれにならばむとす
るに、天に二つの日なく、腹に二つの臍
なきためし。しかれば上下の品定はやめ
て、けふより只かれをそしるまじとぞ。

友とせむ臍物いはい秋の暮

望嶽樓記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに。
名高き富士にむかへばならし。そも此樓
の眺望、東南北にひらけたれば、かの望

嶽の一つならず。千里吟眸の内、田あり
野あり村落あり。神社佛閣のこるものな
く、畫に似て畫には及べからず。龍興寺
に龍吟じて花まつ雨を催し、猿投山の猿
の手に雲なき月を擎ぐ。下戸は餅にもつ
く名とて、蓬が島に頭をめぐるせば、上
戸は酒のゆかりを思ひて、麴が池に涎を
流すべし。もとより主翁文章に富れば、
こゝに來り遊ぶ客、皆一時の英才にして、
新詩百篇隣くうちになり、雅談一日あぐ
びをしらず。扱や好文の花もこゝに向ひ
て色香を増し、天津空の徳星もこゝを會
所とは定むるならん。玉も錦も事かくま
じきを、あるじ詩歌の遊びに餘りて、狂
夫に俳語の文を請へり。其心いかにぞや。
さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を琢き、
灰汁灰汁あくをもとめて錦を洗はむの爲か。それ
だにも不才なる、何を以て砥にあて、何
を言てか灰汁に代む。されども我賀する
事あり。世に祭の棧鋪の、暮毛氈に飭れ
ども、わづかに權花一日の榮をなすは、
其見るものゝ動いて過ればなり。此理に
よれば、此樓はたしかに松樹千年の久し
きを期すべし。さるはその見るものゝ動
かずして、しかも時しらぬ名山なればな
り。しかればあるじも老をしらず、共に
幾代の齡をたもち、卒には此樓に簫を吹
て、風に駕して登仙せむとにや。我居も
幸にこゝに近し。もし長壽の契あらば、
木のは衣の着替を負ひて、其日の供には
はづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る目の餘り

鶴衣

後編

下

うづら衣

後編 下

編笠賛

迹を深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隠しても、浮世より通ふ道あれば、顔しる人にも逢はでやあらむ。蓬萊の島なる鬼の持たる寶はしらず、昔時明が隠形の秘術を傳へて、世に編笠といふものあり。是を戴いて出る時は、車紛々たる市中をあるけども人我をしらず。まして朱雀の夕ぐれ日本堤の曉、いかなるやごとなき人かもしらず。鳥追ひ節季ゆの世わたり、誦うたひよみ賣も、其人の果とも

みしられれば、貴賤通用の寶にして、今泰平の世中には、妙珍きたひの兜より、其徳はるかに優れりとせむ。しかれども女はかぶらず、出家には似合ず、みさぶらひみかさともみしは此物ならず。笠がよく似たとうたはれし清十郎が佛も、是にてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮ぬけ参りの筆にもよごされざるを、茶屋の焼印は平大納言のしわざ歟。そもや印籠巾着脇差のたぐひは、世にある時に愛せられて、鞆帳紅閨の内までも腰をはなれぬ寵あれども、金銀の盡るに隨ひて、つれなくも主を見放して、いづれか漂泊の落目を見つぎたるや。只此物ばかり頼母しくも恩を忘れず、手拍編笠

と諺にもいはれて、破れ帯衣の先途をも見届るにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにをくるゝ操も此時にいちじるし。されども異國には此寶をもたざる故に、豫譲は顔を隠しかねて、漆をさして頼となり。伯休は藥を賣れども、女わらべに見付られたり。たうとしや、我朝には此ものゝ一蓋あらば、大隱の徳あらずとも安く朝市に隠るべしとぞ。

編笠の俄隠者や年の市

幽霊説

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽霊はそもいかなる者ぞ。其姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいただき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるもありないもあり。あゝら閨浮戀しやと、子細らしきは雄幽霊なり。もうし／＼とよびかけたるは雌幽霊とし

るべし。多くは行脚の僧に近よりて布施なしの經を頼み、或は剛なる侍を見かけて無心をいふもたま／＼なり。何の用もなきにあらはれて、女わらべをおどしたがるは、木のは幽霊のわざなるべし。そもや人死て幽霊の自由あらば、佛果を得ぬ亡者共は、我も／＼と立かへり來て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言殘したる申着のこまがね、隣の親仁の無沙汰して居る取かへ錢の事までを告て、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消へぬ日もなき世中に、幽霊の至つて稀なるは、むざとはおこさぬあの世の法度なる歟。されば初秋の盆會には、みそ秋灯籠に座敷をかざり、かはらけ麻木の膳だてに、索麴園子の献立をまうけて、家々に招請すれば、表門より手を引つてはれやかに來たらむも、何の遠慮があるべきに、其佛も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過

て、かゞはゆしと思へるにや、踊ゆかたの伊達染の中へ、經かたびらを耽るにや。そも／＼舟岡島邊野は幽霊の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、はいり所を見た者もなし。しかれば幽霊が出る／＼といふは、世俗のとなへあやまりなり。出るといふは芝居の幽霊に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたて幽霊消るしぐれ哉

杉の門序

季眞は金の繩を解き、祐乘は銅の猿を彫て酒手に宛し風流は傳ふれども、酒屋は

いつこの誰にてか有けん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の歌に、又六が名をしられたる酒屋冥加こそ有がたけれ。さるから其名をしちひ繼て、こゝに酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたうとさには、にくしあるじの高ぶり

て、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞ有ける。世に此得意を附ひとて、撰集一部を思ひ立事あり。只是酒腸の有なしを問はず、月花の方人を求るとぞ。さればこそ此庵の夕顔に隣れども、碓^{カヅメ}のおとも響かず、酒桶の一つもあらず、鹽に文君が色もかざらず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる目には七寶の臺もかゞやかず、菩薩の音楽も聞かざれども、杉立る門の極樂となれば、杖頭に錢をかけて迷ふ人は迷ひもすらむ。只己身の彌陀唯心の上戸と悟らば、賣らぬ酒屋の酒にも酔ふべしとぞ。

月花の下戸に案山子や酒ばやし

興時節庵一文

尾城の西南に把茅の一廬あり。そこに住ける八龜法師、此頃思ひ立る事ありて、みづから其意を説て曰、今世のさまをみ

るに、菩提に心有ほどの人、家あれば必
佛あり。我も其道をたのまざるにはあら
ねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩
を勞せずして、佛に向ひまいらせん事、
いと安ければ、十萬億土の遠きをしらす。
まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はな
くてもあらなん。されば此ならはしの古
ければ、只芭蕉翁の像一舂を刻て、新に
庵の本尊とす。そも我生涯、あけくれ遊
ぶ所、たうとむ所、偏に蕉門の俳諧なれ
ばなり。狂言綺語もをのづから讃佛乘の
因とならば、わけのほる道はかはるとも、
同じ高ねの月も見ざらめや。我ももと商
家に産れて、昔は十月廿日ごとに三郎殿
を祭りまいらせしが、今其家を出、世を
のがれたる身に、かの御神には申べき事
なし。同じ時雨の十二日は、殊に忘るま
じき祥忌なれば、有し世の鯛の者を、な
ら茶田樂のさびにかへて、是を一年の會

日と定め、同志の友をかたらひて一卷の
祭をなさんとなり。願はくは尾城下に此
道の光いやましにかゝけそへて、祭奠た
へず取傳ふべくば、わが此報謝の志も長
く後の世に残すべしとぞ。かの庵主がい
ふ所、是の如く我聞き。同調の志けにと
うなづきあふまゝに、夫を筆にうつして
と庵主が請ふに任せて、記して贈る事し
かり。

盆石記

盆石あり、江の島と名づく。我もと聞け
る事あり。虎の怖しき物がたり仕出たる
に、其座にむかし虎に遇ける人ありて、
實に其人のみ色を變じたりとぞ。我此石
に對し此名を聞に、ことに戀々としてな
つかしきは、少壯の頃かの島に遊ぶ事ふ
た度有て、今も絶境の志がたき故ならし。
そもや此石の容をみるに、わづか尺ばか

りにして、峯聳へ谷遶りて、裾にことさ
ら一つの巖穴あり。是もつばら此名のよ
る所也。主人一語の記を請はる。あるは
巨龜が手に壁き持來れるか、壺公が術に
地を縮たりなどいはんも、今は文人のい
ひふるしたる糟粕なり。思ふに此地は勝
槩の名あるのみならず、妙音天の迹たれ
ませし靈場なれば、ゑの嶋の繪にかくと
も筆はえも及ばじとて、十五童子の手を
勞して、かくは佛を石に削りなし、風騷
の人の手に傳ふるならん。主人もとより
風雅に好けり。是を文房の座右に愛すべ
くば、詩に和歌に俳諧に、只知んぬ、神
助をのづからむなしからざる事を。
波すゞし江の島うかぶ青疊

悼三子禮文

若くて十人の友を失ひたらむも、たとへ
ば髪のぬけたることく、日あらば又生ひ

揃ひぬべし。かなしき哉、老て一人の友の闕たるは、齒の落たるごとく、ふたゝび生ひ出たのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しくしれる子禮翁、此睦月の廿日あまり身まかりぬ。此老一たび仕官のほだしを遭れてより殘生を風雅に寄せ其道の友に交れるにも聊世の是非を論ぜず。かりにも人の長短をいはず。よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を耻す。有がたき隱者の鑑なりと、知るとししる人に稱嘆せられしかば、今や世の惜めるも尋常に過たり。まして同じ老の身の恨、一句はわづかに其かたはしをいふのみ。

魂ばかり秋來む鴈のうきわかれ

六十齡説

上壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齡

に至り、かの壽の數にはつらなりけん。けふは長月の四日、我生れたる日なりけり。世の人の賀とてもてさばくは此日なり。妹あり、妻あり、男女の子ともあり。かれらが心にはうれしともめでたしとも思はゞ思ひもすため、只犬馬の年老たるにこそあれ。もしはかなたこなたに詩を乞ひ、和歌もとめなどして世にしられ顔なる、我に於てはいと耻かし。必音なせそとかねていましめて、さる事せず。けにや古人の耻多しといひけん、我は愚に知らずとも、人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身や夫だけのほち紅葉

夜着頌

まくらといへる和訓はいかなる故ならむ。蒲團とは字義いとむづかし。夜、着る故に夜着といふは、五尺の童子も義解に及ばず。媚を求めぬ自然の名にして、俳諧

の正風とても是を鑑とはいふべかりける。此物 下さまに在ては蚊屋と矛盾の中にて、雁と燕の行かふ如く、多くは質屋へゆきかへるこそわびしきわざなれ。昔孫晨は是をうき瀬に流してより薬一つかねに冬を送り、我國の聖主は寒夜にぬがせ給へる有がたきためしも有を、空蟬のもぬけを恨しは以の外の不埒といはむ。鶯鶯のかたらひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の風をのこす。なべては此物冬の用にして、夏は必選さけらるるに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊てよりかゝりとす。殊に此君なくてはと四時にかはらず愛する中より、聊發明する事あり。そも世に不用の用といふ事ありて、人に其心のさとしがたく、莊子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいゝ所なれど、其餘を不用とて地を堀うがちなば、二本の足もはこぶ用な

からむ。其空地を全うするが不用の用といふものなりと。是も喻のさる事ながら、間ちかく此理を知らむとせば、今此夜着の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とて是を閑なば、德利子のすけなきに似るのみならず、是を左右に覆ふが故に手を働き、寝がへるにも自由のくつろぎとなり、をのづから重しとなりて寒を防ぐの便となる事、鳥に翅のなくて叶はぬがごとし。されど人々常に馴て是に心のつかざるべし。さればこよひも此夜着を引かぶりて蒲團よりあたゝかならば、不用の用をさとるべしと、その童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜着の袖

與_ニ舍_ニ蟹_子文

酒よく人を浮べ、酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にも

よらず。友あるにも飲み、友なきにも飲み、志學の始より四十の此頃に至るまで、脇は只沖の石のかはく間もなき生涯なれば、昔の人に思ひなぞらへて、ある時左蟹の二字を戯れあたへしが、辛巳の秋重くなやみてより後いかなる時か来りけん、

のまぬはのむに勝り、酔ざるは酔ふよりも面白き物をと、卅餘年の夢忽然とさめて、さしも世のそしり人の諫も蚊虻に聞拾しおのこの、壺を破り盞を碎きて、零もいとふ下戸となりけるこそ目さむる業なりけれ。此人の痛飲せしほど、下戸はさらなり、上戸仲間さへつぶやきて、かくては命もつよくまじく、錢はた頓て盡なんと、うたてき事に思ひし人々、且驚且賞して、是を賀してやます。されば楓の青きより霜を経て染出せるは、二月の花よりも紅に、枝柿の澁きより甘きにかはれる味は、蜜砂糖に勝れるを思へば、生

れながらの下戸に彌増て、もとの青きに戻るまじう、始の澁にかへるべからず。

さらば其名の蟹をも捨て、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の酔郷には頭をめぐらすべからずと、舍蟹の二字に改て贈る事しかり。

贈_ニ不及法師_文

でむしのなまじるに家持て、蟻蚯蚓にはうらやまれ貌なるも、行先をを負ありく苦しさは中々なきが勝るべし。不及法師が求えたる方丈の栖は、もとより樹下石上の身にほだされざる借屋といふものなりけり。落たる壁も雨も軒も只家主のあつかへば、我手に勞する事をしらず。夕顔のゆふべにあけば、朝顔の朝は捨るに安し。況や津梁の大志あらば、しばし只神龍の雲待つほどのやどりにして、卒に地中の物にあらず。我知りぬ、我しりぬ。

心とめぬ安さはしらじ蝸牛

濯老井賦

瓜島に分ち得て早き二月の初物を献ずといひしは、華清の温泉なり。我に事たるとよみしは、はつかに山水の滴るならん。

それは至尊の遊びに愛し、これは隠者の會閑を助く。それにあらず、これにあらす。其二つの間に湧出せる濯老井なるものあり。これ布袋庵の名水にして、あるじはもつばら蕉門の俳諧に遊ぶ人なり。昔孝行の徳によりて養老の水流出づ。天はた風雅を感じて殊に此井の生ずるにあらむ。あるじのこゝに樂むや、もとより其名にしおへる年立かへる若水はさらにして、夏は葛に汲て河朔の飲の渴を消し、秋はさやけき月をうかべ、雪の夜の茶を煮るにも水を蔵く手を勞せず。四時

しんぬ濯老の名のむなしからざる事を。されば我聞、一たび食泉を飲時は皆千金を懷とす。しからば此井の水を甘なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽三石のな茶を思ふべし。

岐岨賦

木曾 岐岨 吉観共通用

信濃は吾が尾藩に隣り、朝もよひ岐岨の山は即封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるおのこ有て、予が草廬に來るごとくに其地の山川勝槩を語る。語りくて後に請ふ事あり。其所ををつらねて賦を作れとぞ。されば、木曾は文武帝大寶二年始て此道を開きしより、今や西東兩都の通路にして、予も三度の往來せしかば、いまだふみも見ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野は木曾家の舊居にて、もとは御殿と書けるとぞ。野尻須原、上松福島は山中の一都會、則巴笑

も爰にすめり。宮越・藪原・風そよぐ檜井の里・鯉川の宿まで十餘の驛亭、各家居つきく敷、大名の旅ねには本陣の幕をも翻し、荷馬の鈴の聲夜る山を過て、今は椎の葉にもる不自由もなし。しかれども此山中に、覺束なくも呼子鳥の出女の色を置ざるは、是聊の傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる我邦昔よりの法令なり。されども宿の間とは深山幽谷の難所なれば、詩人は偏に蜀道の險に比し、斷腸三聲の猿を憐み、和歌には兼好法師が世を遁れし始、靡ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、先此山中をこそしたひしか。俳諧猶此地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは吾翁の置初し枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のこるもの城山あり。福島興禪寺・宮の越の徳恩寺に各その影像を留む。元服の松天竺竹硯水簾遠の故宅、御料の森は光盛が陣

迹、樋口が谷は兼光が舊蹟。樋の小彌太は野上に生れ、今井が城址は野尻に遺る。山中の薬師は行基の作、臨川寺の寢覺の床は仙客の釣垂し所、奇石怪巖、人よくしれり。されども歌人の墓ふものは、掛其原御坂風越の峯。小野の瀧はすぐれたる飛泉なるを、戸難瀬布引にも名を争はざるは都に遠き恨ならむ。男瀧女瀧の契はかはらずも、運理の松は今名のみなり。名にたつ烟の浅間山はこゝに境のへだれども、御嶽駒が嵩に不斷の雪を見せて、富士にも肩を並ぶべし。三歸りの翁の齡は死嫌ひの人に美れ、巴女が勇力は男勝りの高名をとむ。良材昔より伐れども盡す、尾城に運びて万家の用とす。山を出して淵川の漲る岩間を下すには、篙工の術に馴て、曲乗踏かへしの自在を働く。他郷の及ぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。福島には關

門ありて、治る世にも備へ固く、鶏のそら音もゆるさざるは、代々山村氏のあづかれる守りなり。南宮諏訪明神、鎮の明神八幡宮、禪刹には定勝寺長福寺兜の觀音岩戸の觀音。鎮の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともしといへり。彌生の浮石明星が岩釜が橋伊奈川橋滑川橋櫻澤の橋は是岐祖と松本を分てる堺なり。かゝる佳境に居て風雅に遊び、三石の奈良茶をしも十石峠の名に積らば、俳諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり。盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧はなけれども馬市を賑はし、巢鷹は年々尾府より奪て東都へ獻ぜらる。櫛けやきの類多きが故に、器に製して近國に販ぎ、行客必是を求む。産する所干瓢岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走を賞す。末川の蕪、風味又世に超たり。すべては

雪深き故、春の花遅く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。抑信濃は十郡、此賦豈一國の半をも盡さんや。只是木曾に屬する事を纔に拙き筆につらぬ。

四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃江勢の三つを兼て一望の内に入ればなり。其一望に入る事は、つらなれる山々の是をみすればなり。むかし妓を携し東山はしたはしからず、北山はまして移文のうき名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然として見し南山も侶ならず。をのづから此事のむかふ所、立つとく西の山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悦ばしむ。されば山を愛するに品あり。仁者の樂むといひけんは、理屈なればこゝに論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて身の隠れ家を求める者

は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を挑て雪の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛する者にして、必しも露運が辰に烟霞を攀て 山の寂寞を問ふにあらず。然ればいづれの賞心か勝らむ。思ふに夫三國一の名山とても、扇に

たとへ烟を詠めて、只眺望の上にこそめでつれ、鹿のこまだらの雪ふみわけて富士詣とて登るなどは、必無風雅の人のな

す事なり。山に入る人山にても猶うき時はいつ地行らんと、よみて廻りし人も有をや。此亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山にあらず。飽て枕に倚る時は山なく、起て檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高き哉其趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求て、三字を題して櫓に掲ぐ。其餘狂語を予に請はる。いでや其あるじは、知己の舊きといふのみ

ならず、もとより同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其地は能く知るよしあり。鄙陋は愧るに堪たるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。

六林文集序

俳諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此道に遊ぶ事むべなるかな。ことしの春三韓の客東都に使用する道すがら、我蓬左に宿りせしを、出會ける人々扇をさし出し一筆を請けるに、韓人笑つて芭蕉のほ句書てあたへける。そもいつこにて學びしやらむ。ふりにし王仁が難波津のためし、ふたゝび俳諧に立かへりて今見けるめづらしさよ。かゝれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからむ。水にすむ蛙も俳諧々々とは鳴なるべし。しかるに世の

俳人、ともかふも五七五はいふべし、只俳諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其体を學ぶ者の間々あるも、よくいふものは甚稀なり。古人の文とても其風体一つならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、潜に是をいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず。たとへばやどなき人の、編笠羽織にやつして花のものと床几によりたれど、田樂園子に手をふれず、茶ばかり飲てやすらひたるが如し。其位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の興に三線とりて、相の手ばかり引捨たるがごとし。彦根の許六は物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとして雅趣のなきにあらず。

たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見しられて、駒下駄に尺八吹て大道に肩いからし、あはれかたはらに人なきがごとしといはん。其餘碌々たるは論に及ばず。只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入わたり、其形を用ひてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず雅に過ず、主意よくもとすえを貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ。

誠に難からざらめやは。我友護花關の六林子が文章、章ごとに玉をつらね、錦を綴れり。我常に見を驚して三の舍を避るに至る。他はいさしるべからず、本州誰か其右に出む。されども音を知る人は稀に、巍々洋々もいたづらに、猫に小判の耳なければとて、包て光を世にあらはさず、只獨の樂とす。頃日みづから輯録して予に小序を求る。久しく金蘭の契ありて辭すまじきゆへながら、不才の腸何

を探りてか是に當らむ。されども又思へる事あり。世に呉服を商ふ家の、縹子綴子紗綾縹紗は、店に庫に滿々たれども、入口の暖簾には必木綿をこそ用れ。其店を尋る人の、まづこれに目を留れども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば我が木綿の才を以て、始に一重の暖簾を掛むには、などか店物の價を妨けんやと、つるにはとからず序書て贈りぬ。

與し號說

爲二箱屋巴良一

和歌には神とも世にしたはるゝ昔男の昔をきけば、芥川のかげ落にあだ名の髪を切られ、詩賦に秀しもうこし人は酒屋に掛のたゞまりて、朝三暮四の焼餅さへ乏しかりためし多し。こゝにしれや、風雅必しも身を修る助とならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富を來たさず、家業に思ひかふべからず。人の咄にきけ

る事あり。そのかみ藥種を商ふあるじの連歌に好けるありて、たま／＼宗祇を招き請、一座の興行に及びけるが、我が句の順に當りて案じ入ける時、表に人の音なひして、僅に一二錢の胡椒を求る者あり。折しも店に應對の人なきを見て、我句を惜がらず他に譲りて其座を立、胡椒を商ひ遣しけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌にすける、かくこそ有べき事なれと、殊更に稱美有けるとぞ。吾子が俳諧に耽るとも、此ためし忘るべからず。産を破り家を沽りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事としてこれをしたはゞ、傾城實も博奕打も同じつらなる俳諧なるべし。或はまた身持よく家榮へば、見る者ごとに必いはむ、俳諧はめでたき物なり、翫ぶに妨なしと。さらば俳諧に第一の奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、夷大黒も風雅を助けて、つるに俳諧の妙處

にも至るべし。今や其居に號を乞れて其

家の業を棄す、藍光舎と書て贈るも此意

有による。今我が贈る藍より出て藍より

も濃き趣を得ば、世に俳諧の名も高くあらはれて、光の一字も空しからじとぞ。

聯句 引

晝寐に槐安へ至りしは、夢にも足のまめなる男なればならし。我が夏の藁の門をも鎖して、戸出もせぬ物くさをしればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧の訪ひ來て、半日の閑談をす。いづこにすむ人ぞと問へば、近き方の穴にすむと、しらばけいへば、根問に及ばず。聯句せんと筆とりて挨拶の發句を唱れば、妖僧會釋の對を吟す。やゝ短歌の二卷に至れば、退屈の尾を見られじとや、末は又の夕べと歸るを送れば夢さめぬ。跡に泰國子の土産も見えず、只たばこの火の僅に

残れり。

挨拶

雖^レ汲^ル水^ヲ無^レ葛^ノ庭^ニ宜^シ松^ノ氣^ノ色^ヲ長^シ咄^ヲ夜^ニ方^ニ冷^シ酒^ヲ醒^ス慙^ニ嫁^ノ一^ツ擇^ム日^ヲ四^ツ火^ヲ灸^ス遲^ク櫻^ヲ留^メ記^ス念^ス
可^ク涼^シ風^ノ在^リ羅^ノ山^ニ惡^シ月^ノ邪^ノ魔^ノ大^ニ跳^リ盆^ヲ亦^モ過^ス茶^ヲ沸^ス饗^ス婆^ノ一^ツ憐^シ春^ノ万^ノ葉^ノ歌^ヲ歸^ル雁^ノ惜^ム余^ノ波^ヲ

借^リ宿^ヲ疑^フ弘^ノ法^ヲ耳^ヲ言^フ牽^ル袖^ヲ笑^フ換^ヘ題^ヲ試^ム頓^ニ阿^ノ截^リ指^ヲ女^ノ郎^ノ誓^ス口^ヲ説^ク入^リ牀^ニ和^ム移^リ敷^ヲ殘^ニ暑^ノ褥^ヲ澤^ニ腰^ヲ祖^ノ父^ノ痾^ヲ濱^ニ市^ノ初^ニ鮓^ヲ貴^シ脱^リ曬^ス有^リ明^ノ簑^ヲ花^ヲ開^ク粧^ヲ寺^ノ院^ニ辻^ニ能^ク油^ヲ虫^ノ多^シ柳^ノ動^ク彩^ヲ溪^ノ河^ニ
後うづら衣、晝寐より明和の末まで、牛蒡庵の遺稿をもてこれをうつす。

六林校

鏡裏梅

うづら衣拾遺

節分賦

こよひは鬼のすたく夜なりとて、家々に鰯の頭終さし渡す。我大君の國のならは

し、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊に此夜をつゝし給ふとこそ。世をのがれたる翁の巨燵に足さしわたし、年を惜むの外に、何のわきまへたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨たる世にけなきわざながら、家に老たる男のかゝめる腰にしはたれ袴かけ

て、けしきばかり豆うちちらし、聲わな
なきて鬼やらひたるも、昔覚えておかし。
年の數を豆に拾ひて、厄拂ふ者にとらす
るものとて、をのがさまゝする事なる
に、むかしは膝のあたりかゝ探りても、
其數は得たりしが、今は八疊の一間にも
あまるばかりに成にたるぞ忙しきや。厄
拂ふ男の、宵は町々をめぐりて後、夜更
るほど聲呼からして、此わたりへも言な
ふ事にぞ有ける。行年波のしけく打よせ
て、かたち見にくう心かたくなに、今は
世にいとほるゝ身の、老はそとへと打出
されざるこそせめての幸なれ。

一えだの梅はそへすや終うり
雪はらふ垣ねや梅の厄おとし
梅やさく福と鬼とのへだて垣

八百坊記

二十五條といふものに、蕉翁の詞とて、

詩歌連俳は上手にうそをつく事也とぞ。
翁は俳諧の祖師なり。詩歌連歌の人はい
さしらず、俳諧師は是を守りて、我劣ら
じとうそをつけども、夫も翁のうそかも
しらず。あるは門人のうそにもやあらむ。
うそは乾坤に満ちたれば、我口にうそは
つかねども、耳にはうそを聞ぬ日もな
し。そもやつれ草に、うそ聞く人の
品々を言たれども、うそつく人の品はい
はず。うそに大うそあり、小うそあり。
佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を
教へ、傾城のうそは人を迷はす。只はい
かいのうそばかり人の爲にいはず、身の
爲にせず。跡なき雲の郭公、名のりかけ
てつくうそは、人をあやまる罪なしとて、
うそ八百坊の額うちて俳諧に遊ぶ人あ
り。實も鼻のほどおごめきて世路にうそ
つく人は、我はうそならずと偽り、みづ
からうそなりといひて俳諧する人は、そ
れ則まことなれば、交を結ばむには頼む
べき友の一ツなるべし。されども龜忽の
者ありて、坊と屋の字を心得違て、茄子
を大根をと求めに來たらむに、是は青物
賣る店にあらずと、あるじの答に不興し
て、さては家名にうそをつきたりと、つぶ
やかむ無風雅人は、論するに足さるべし。
八百坊の記を請はる。我八百の意を問は
ねども、そのよる所を推量して、此一語
を書て贈る。あるじの心まことあらば、
よもや此記を捨てからず。

自在鐘頌

世に自在鐘と呼ぶ物あり。夫は爐上に下
けて茶釜藥罐をつるすに、延縮を心に任
する物とぞ。わづかに一用をなして、何
ぞ其名のみこと敷や。予別に自在鐘
を得たり。是は路分のぬし、我が老衰の
立居むづかしきを見て、居ながらの用を

なせとて、新に工夫してみづから造り出し、我に贈れる物にして、もとより手の巧なる事、左甚五郎が右に出づともいふべし。しかのみならず一章の文を書て添ふ。仙才又妙にして愛すべし。予も此頌を書むと思ふに、義經の弓流猿猴の手の喻を彼文章に取られたれば、外に文華を饒るべき言のはもなし。抑此物の多能なる、座右に入用の調度を搔寄するはさなり、杖として老を助け、棚の鼠を驅出し、簾にすかく蜘蛛の巢を拂ふ。俯して石公が橋下の隈を取り、仰いで伯獵が松の羽衣を盗むに便あり。花は折たし梢は高しと、心づくしの木のもとにも、是をもつて曳たはめて、ほしき枝をもたやすく得べければ、まして柿を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に隨ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖をぬらすに及ばず。洗濯の盥のもとには、淵明が酒臭き頭巾も

懸て干つべし。さればたとへ八町二郎か手には短しとて捨るとも、物くさ太郎が膝もとには、此君なくてはとも愛しぬべし。もし此物の世に弘まりて、彼爐上の自在鍵、我名を奪ひたると爭論を起し、訴に及ぶとも、對決の場に臨で能の多少をくらべんには、板倉殿の捌にもあやまたず勝を取べし。自在鍵く、世に己が名を憚る事なかれ。

發句塚序

聞ならく時節庵の社中、庵主に告て云、足下百年の後には生前得意の句を石に彫、不朽の發句塚を築くべし、此約必しもたがへじと。庵主云、誠に厚情謝するに堪たり。しかるに、たとへ劉伶が墳に酒を灑ぐとも、只徒に蟻の穴を驚かし、徐君の塚に掛し劍も、其意しらぬ人は鴉威しともみてや止なん。汝達その志あら

ば、同じくは生前に其事あれかし、さらばまのあたり見て悦び、一言の謝禮も述なんをと。社中皆云、是只忌々敷の憚あり、庵主其望あらば、もとより我曹の願ふ所なり。さてぞ言を食まぬ寸志も見えんと、しきりに此事を營て、時しも春の鶯なく寶生院の傍にさるべき地を求め、一基の石を建、一堆の塚なんぬとぞ。頃日庵主來り、予に此事を語りて一句を請り。實かの北斗をさふふこがねも、南都をはむる諸白も、身の後には何かせん。そもや生れぬ前の櫛櫛定めとは、早計を營る謬にいひて、花見にと催す興は、嵐に吹さまされ、月みんとたくむ空は三五の十八、にくの雨に妨られて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此終焉のまうけばかり、万に一つもたがねば、あすの事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰かうらやまざ

らむ。年々春の草生すと白氏が歎には事かはりて、是はめでたきためしなるを、とみに手向の一句を寄す。

我とわが塚の掃除や春の草

節分庵記

もろこしには鐘馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其容を見るに、眼を怒らし臂を攘けて長剣をふり廻せば、^鬼實鬼は恐れつべし。されどもさはがしき其中へ

は、用心ふかき福の神は、怪我を氣つかひあぶながりて、あたりへはよりつき給ふまじ。かしこき我國のならはし、年々

の節分には、ひよはき親にも年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで嘩ちらせば、鬼は外へと逃り、福の神は呼に隨ひ、いり豆の香にめで入かはり給ふこめてたけれ。されば爰に節分菴あり。是常住の節分にして、来る福は日

日に親しく、去る鬼は日々に疎し。されどもあるじは殊に酒を好みて酒豪の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらむ。鬼とな思しそよ、赤きは酒の咎なるものを。只是常に訪ひよりて友とする者、とくく上戸なるべければ、古く諺にいひ来る、下戸と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれ

て以て是を記す。

與晉路二辭

晉路は竹内某が男兒、二歳なる年の初に、正月が来たうまぐらゐれぬといふこゝろに、こゝろをみても見れば發切也。霜感じて脇を付て、戯て門人とす。

不佞少年の頃より俳諧を好み、今老境にも此一癖はやまず。是を幽居の友とすれば、何知り得たる事もなければ、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらん。推敲を問寄るもあれど、師弟に似たるを慙いとへば、身の薄劣を告て固く辭し來れり。ざるを茲年六十六歳、

始て一人の門人を約する事有て、名をも晉路と授く。此弟子年二歳、火燵に脊をくらべ、乳を明暮にして、いまだ奈良茶を甘はず。もてあそぶ物は何ぞや。風車の花につらきも、起上り小法師は月に寐ぬ夜の心あるかも。さるから師に對していまだ一字の間をなさず。我が物ぐさを勞せざる事、深切最上の門弟、いづれの人か是にしかん。我辭せずして約をなすは此ゆへなり。しかれども我おひ先に示す事あり。故人いはすや、和歌に師なしと。況や俳諧に於てをや。只法式はよく習ふべし。されども其道に交れば、法式はおのづからにも知ぬべし。法といへば理非の穿鑿なし。天下の公道にして、隨分人のしる事を專とす。祕する法は有べからず。しかれば世に祕事口訣とするは何ぞや。物に用捨の心得あり。或はてに於業の習あり。夫は皆當然の理にして、

我智明らかなる時は、己と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其一事に止りて他に働かず。我と一理を知る時は、万端にわたりて物みな明らかなり。師はたゞしばらく東西を指さすのみ。たとへば詩文章を學ぶ人の、祕事口訣といふ事は一ツもなし。しかれども上手あり、下手あり。只我才のなす所にして、何ぞ別に祕事を責まむ。世に祕事傳授といふものは、渡世の者の術なり。予は渡世の爲にせねば祕事口訣はならず、習はねば何をか祕せむ。五倫五常は外に師あり。狐狸の輩に迷はされて俳諧に泥すべからず。明和四年朔旦冬至、半掩庵隱士示之。

寄未足齋歌

未足齋。未足齋のあるじ、こゝろみに物とはむ。そもや花にめでゝ春の日の足らざる歎。傾く月をしみて秋の夜の

足らざるか。目に物のたらざるか。心に物のたらざる歎。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいがしく、蠅のどくにあつまるは、あるじの常に笑ふところ。茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名はしめして、未足はもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなる哉。足して見ぬ心や月の十三夜

夢二客賦

秋の蟬猶梢の暑さをのこし、暮待つ翁の眩を曲たるかりの夢に、怪しき二客の争ひを見ける。一人は色黒くして疎なる髭針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に、頂すこし蓬^{ツギ}なるが、眞桑居士と稱す。共に酒臭きはいたく酔たるやらむ。先生まづ進で云、我そも居士の下に立べくもあらぬを、今一桶の内に在

て、何ぞ我より上つかに横たはれるやと。居士云、我もまたいかでか先生の下とは定らむ。予はひたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず。昔邵平が東門に作り、殊に驪山の溫湯を分ちて、二月中旬の走りをも献ぜしものを。へいな、もろこの事はしらず、山時鳥里馴る頃は、駿河のはつなり、價玉の如く、籠に盛り馬にのほりて、東都に下る勢ひを見すや。たま／＼しろ瓜といふものありて、わづかに其威を借れども、我目には驢尾の蠅とこそ見れ。へそも／＼官人の他郷の役に倦て、故國へ還る悦の時を、瓜期とて殊に待るゝものを。へさらば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするにはいづれ。へ我聞、むかし禪僧にふみ躰^ミられて、夢裡の蠅蟻となりて命を請し妖怪はいかに。へいざ我も亦聞り。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、晴明に占はれ行尊に祈られて、

踊り狂し不祥こそ増りぬべけれ。へ山城
のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞に
もつらねしぞかし。へ扱はかのわさゝの
糟につけ置てと、讀ける歌はしらざりけ
るよ。へうたてやそれは秋茄子の、嫌に
立けるうき名ならずや。へ大原や田中の
村の瓜作り秋は果ともかりもりなせそ、
としめしける歌も有しを、見ぐるしく世
にすさめられ、名をさへかりもりとは、
平家の公達を似せけるやらむ。へ只己が
身を省るべし。味噌に油に味ひをかざり
て、寺に鵲燒の仇名こそにくむべきを。

かくいひ／＼て果しなければ、今は翁も
枕をもたけて、あなよしなし／＼、かれ
はかれ、これはこれ、瓜の蔓に茄子はな
らず、只己がさま／＼にて、何ぞ尊卑の
品あらむや。不用の争ひをして、なれそ
こなひ味變じなば、人に疎まれ捨られて、
畠のこやしと成や果なむ、やみね／＼と

扇は把て席をうつ事三下。ふたつの姿た
ちまち消て、夢も亦さむれば、只青丹よし
奈良漬桶のみ、依然として棚本に残れり。

祭嘯花文

この秋は毛利嘯花子が卅三回の忌に當り
て、いさゝか其魂を祭る。我少壯の日、
明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老
ぞおどろかれぬる。そも文場に交りし其
世の人を指に折れば、夫も失せ是も去て、
のこる者けふこゝに打かたらふ只三人
斗。木兒翁は七十を越へて猶健に、米布
は六十に臨てもとの姿さしもかはらず。
只我のみ六七十の間にながらへて 其數
に入ながら病み衰へ、さまもかえて有し
にも似ねば、魂もし歸り來るとも、野中
の清水も影迷て、知らぬ翁とおほめきや
すらん。よし只かはらぬ心の手向を、尙
くばうけよとぞ。

送曉臺辭

此秋名にしおふ更科の月みん、それより
武藏野の露をも分けばやと、思ひ立る曉
臺を送る。其行先の信濃路には、我知れ
る千丈友梅なるおのこあり。武藏に布袋
庵の主は、殊に年來の交あれば、我が一
言を傳へて立よらむには、假のやどりを
よも惜むまじ。行ければよし此陰により
て、心の花のあるじとせよと、陽關の一
句を筆して、別るゝ枉にさしいれぬ。

懷舊辭

漏らぬ宿おしえむ月の旅ながら
風月堂を訪ひて、むかし翁の此家に書殘
されし一軸を見て感あるの餘り、紙筆を
請て一句をとどむ。
手の跡や雪の足あとと見ぬ世まで

六林はいく、風月堂は尾府本町書林なり。
此家に芭蕉翁行脚の頃立よりれて、一句
を残されし眞蹟あり。今此に模寫す。

題像文

印
書林風月堂きしは
名もやさしく覚えて
しばし立寄てやすらふ程に
雪の降出ければ
はせな印
いざ出む
ゆきみに
ころぶ所まで
丁卯臘月初

夕道何がしに送る

縦九寸五分、横一尺四寸五分斗有。今
種物の一軸とす。
是貞享四年丁卯冬の事なり。今天明八年
戊申に至て廿二年なり。
夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あ
ら野篁の作者なり。

人の見よとて携來る一軸をひらけば、上
に我句の書添てあり。さては此翁は我姿
を寫せるにこそ有けれ。老の手に鏡も拾
て久しければ、我面かけは我忘れにたり。
今は此繪よりも劣りぬらむものと、あ
さましく且なつかしく、暫見とれぬる内
に、傍の童の口さがなくてよみける。
金岡が馬にならば夜は出て
萩の戸棚の餅や捜さむ
いとにくけれどいかゞはせん。

更幽亭記

から衣うつゝの山里に、代々藥を鬻ぐ家
あり。所は少陵がたづねし張氏が隱栖に
似て、貧富は同じからず。夜金銀の氣は
只此家より立のほりて、上清童子常には
たらけは、物の不自由なる山中ならず。

今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中
に、實山間の閑寂を求る時は、奥に風塵
を隔て、名におふ手枕の茶を煮て、一室
に幽趣をたのしめば、もとより深山瘴に
近くして、伐木の丁々たる、耳さらに清
かるべし。此亭に號を呼ぶに、更幽の二
字を以てす。我は老と病にほだされて、
神飛べども訪ふ事あたはず。訪ふ人あら
ば、此名の虚ならざるを知るべし。

つのもじ序

むかし／＼蒙恬といへる人、始めて筆を造
りけるより、和漢に能書の人こも／＼出
て、我朝の高野大師は五筆の名をふるひ
給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつ
て知る所にあらず。かつその大師、又四
十七のいろはを造りて、和國に自由の勵
をなす。しかるに今また六林出て、その
四十七字を配りて、文を綴り歌をつらぬ

るに自在を得て、人の目を驚し、つもりて一卷の小冊子なんぬ。是また假名を始し大師のしろしめさざる所なり。聞ならく、むかし世に文字てふ物の始りし時、かく人の智さかしくなりて、己等がかくろへて住かたならんと、鬼の目に涙して泣けるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけむ。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我朝の六林を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此一巻をたくはふ家には、鬚の頭も何かせむ、終もたのむべからず。奇なる假名、妙なるかな。舞津の老隠感嘆の餘り、戯れて此端に筆とる事しかり。

釜 賦

舞津の老農が忘年の一知己あり。俳諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつ

くしからぬを、濁りて富るよりも清くて貧しからむこそと、高きを慕ふ心より、史雲が釜の魚を生ずるに至らざれども、弊居の板間まばらに荒て、月もまに／＼竈に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、月夜に釜のおかしみによるにや。さるに近き頃、市中に時雨のやどりならむ、ある店先によりて郭巨が鯢もからず、あやし／＼やかなる釜ひとつ掘出せり。是を得て大に歡ぶ。そのさま茶人のたのしめる物ともみへず。又塵俗の世帯じみたる物にもあらず。すべて夕顔の地紋心ありけに、其容つゞ／＼といふに及はず、ゆかしむ人は尋てみるべし。もと此人久しく茶道に遊びて、其奥儀熟して後の今は、必しも茶に専ならず。さりとして思ひ捨たるにもあらず。むべなり、此釜のこゝろに叶ひて愛するや。冬爐の爐に懸て湯を湧し茶を煮るの外、あるは霜

夜に雜炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其大さ^は是を以て知べし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月の名を定る事年有て、果して此釜を得たるはいかに。其名や渠を呼出しけん、かれや此名を兼て呼せけむ。我が釜か、かまが我が。されば世の物語に、昔^{むかし}倭藤太なる者、龍宮に頼れて、その謝禮として、取れども盡ぬ俵を得たり。夫より倭藤太とは號せしとぞ。是を思ふに、蜈蚣を射ざりし始の姓を何と言ひむ、世に俵を得たるなるべし。しからば此釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤傳ふべし。よしそれはともあれ、此かまのかまはぬ事。つら／＼思ふに、名にのみ聞るぶんぶく茶釜とはいかなる物ぞ。字は分福とも書やらむ。或はこれらの事をもいふか。もし年を経

て毛がはえたらば、茶筌で剃て事なかるべしと、かの老農求めにあふて筆に信せて漫に記す。

與脇息文

徳三語内津更庵を三止之需一

机には狭し脇息には長過たり。是は我庵の長物といはむ。用る事もなく側に捨置たるを、世にすたるものはなかりけり、三止なるおのこ、是を得させよといふ。もとよりおしまづきのおしますして譲り與ふ。小庵の棚を狭め、煤拂の厄介なりしを、我はうつゝ山の鬼に瘤とられたる心地とする。其事を書て添よといふ。筆に任せてかくのごし。

漢和手引草序

俳諧の漢和、昔今きく物多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に字を知らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、

法式も覺束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に未足齋の主人、此道に遊ぶ。天斯文を助けしにや、はからずも壁の中より古き一帖を得たりとぞ。猶是に筆を加へ、こまかに料理塩梅して、齒のなき口にも味ひ安き一卷を著して、手引草と題して初心の俳士の便とす。我はもとより一ツ穴の狐、快なる哉くと、撰者の求に任せて、序者と化て一語を贅す。

香木記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍顯れて姿見せけるとぞ。好むに信あれば物に感應ある事なきにあらず。我府下に花井某、深く香の道を好みて常に樂む事久し。しかるに其家に古く傳たる白あり。いたく年經るまゝに底なども破れにたれば、今は所せき不用の物なりとて、くだ

きて釜木に打交けるに、ある日いみじき妙なる香の家にみちわたりけるを、あやしみて求るに、かの竈に燒ける白の木なりけり。心いれて見るに、實木（じつぎ）のさまよのつねならず。おどろきて香の師のがりたづさへ行て是を問ふに、うたがはず赤梅檀にさだまりぬ。名はそのまゝに花井白と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛焦尾の琴を得たるためしにもかよひ、邇日（この頃）こゝらあつかひ草にして、めで美む事にぞ有ける。されば白といふものは、賤の手にならしてそのしな下れるに似たれど、君みずや、久かたの月の中にも藥を搗ときけば、もしや其白も此木の類にやあらむ。

白の香や月の鬼はきゝ知らむ

百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば唇寒しのいましめも、只いふ人のうへにして、聞者に

はあづからず。さればにや耳を縛せるためしもなく、耳たぶ寒しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教は、たとへばまろふどの來りて非禮を語ればとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎてもむかはるべきかは。たゞ是聞は聞ながら、其よきはとどめ、あしきは捨て、心に擬のあらむのみ。ましてよしあしの理屈を離れ、俳諧一時の談笑に客を愛せる百話亭には、さぞなるあるじのつれづれもなからむ。そもく世に百物語といふ事を傳へて、もし火のもとにまどゐして、奇怪の談をかたみにいひもてゆき、其數百に滿る時は、かならず妖物の出るとぞ。人もし百話亭の名を聞て、扱はかの百物語の會所かとも訝からん。さればこそ俳諧の夜會ありて、其句數百に滿る頃ほひ、勝手口の屏風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失たるは、夜食の時分を窺ふならむ。

やがて臺所に摺小木踊り、組板動き出、膳棚のあたりくはら／＼として、しばらく家鳴のけはひするは、妖物の出るにはあらで、奈良茶の出るなりけりと、見し人の語りしなり。此亭に一章の文を請れて、例の戲言を筆に任す。是も亦世のよしあしにわたらざる、百話の内のひとつに宛んには、饌古の咎もあらざるべし。

贈佐屋洗耳序

をしめども限あるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鶏塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其句を残せし地をししたひ、地をししたふが故に此塚をししたひ、塚を慕ふがゆへに樂し人をししたふ。其したはるゝ人は誰ぞや。此里に久しき驢士吟山なり。むかし月空庵に其道を學びて生涯風雅に遊しが、惜しむべし、丙申（安永五年）の冬、享年古稀に四

つを添て、卒に夜臺の客となんぬ。孝子洗耳哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつらねて世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。嗟乎我もとより不才の樗櫟、今は猶老朽て、花もなく葉も落て、聊のこのはも綴にたへず。たま／＼かゝる求あるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり。いまさらに何をかいはひ。わづかに一句を寄せて且いたみ且弔ひ、且は求に答る事しかり。其謠里の歌に曰、

清女が筆の跡も、たゞよのつれの
さまをこそいへれ。

かなしきものことし師走の月夜哉

知雨亭後記

城北の市中におそろしきおのこ有けり。世々藥を鬻て業とす。表には兒玉屋の腰簾をうき世の風になびかせ、世わたる塵の紛々とい見ゆれど、内々は孤松軒の額を

閑適の月に照して筆硯にあそび、詩を賦し文章をつゞりて、見ぬ世の人を友とす。

此樂、世の俗客は夢しらす。吏隠祿隱の類にして商隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隠して藥を賣らんとして、かへつて安く見知られぬ。今此おのこは隠れずして賣る故に、其心をよく隠る。一日我が幽栖を敲て後、はじめて其高致をしれり。そも／＼我は隱遁の客をまねびたれども、猶世に隣るが故に舊識遊人に撥はたされて、夙志の閑を得る日少し。かれは中々世路に立て、人しれず閑を得る。鶯と鳥のうへを見るに、夏木立のしけみによれば、鳥よく隠れて鶯はあらはなり。雪のあしたに見わたせば、鶯よく隠れて鶉は紛れず。黒白の隠見いづれを得たりとせむ。されば我亭の、もとより知雨と號する其意を汲たりとて、頃日例の金玉の文をつらねて我に試み問ふ。

文意誠に面白く、くり返して擊節に堪ず。されども此二字を取る事、聊別に微意あり。巢居知風穴居知雨の語あり。つら

／＼我身の上を思ふに、幸に上國世臣の家に生れて、不肖の身のおほけなくも父祖の祿を傳へ、剩こちたき官に承乏して、南郭が竿を吹しも二十とせあまり。たとへば狐狸の人らしく化て、よく尾を藏したるが如し。程ふるまゝに、しかすがに、青松葉の辱を恐れて、みづから妖の皮を脱、魯鈍の心算を顯し、卒に蓬蒿のもとに穴を營、かく世の外に餘齡を守るなり。知雨の因縁かくのごとし。今は獼鼠にも迷はじとこそ思へるに、人や穴を嗅つけて、佗たる栖も面白きやらむ、今は叢に道ふみひろけて、腹つとみの閑を妨るゝ事しば／＼なり。されどもしか厭ふは塵客の事、孤松のあるじは同調相應するの人、世にいふひとつ穴の狐なれば、來

ん／＼といはむには、昆布に山椒の滌茶をまうけて、我も亦快ととかたらふべし。

方十園記

あるじ名付て方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず、反にもあらず、只わづかの間地なり。爰に山をも築かず、泉をも引かず、賤がこもりのまねびして、明暮慰むつまとはなせり。世の人はいへ、有宗入道をして此園を見せしめば、かくこそ有べけれど、手を拍て稱嘆すべし。時も今安永四年閏臘月、若菜つむべき春巳にちかき日、七十四翁半掃庵筆とる。

指峯堂記

年頃相知れる好事の漢あり。あらたに世わたる業をいとなむとて雪坊の主と成けり。けに世に商沽のさま／＼なる中に、

是ぞうらやましきなりはひならし。店辭

にして秤十露盤もさはがず、常に文人雅士になつさひて、我智の益るたつきとなるべく、諺にさがなきものにかぞへたるお乳の人はいさしらず、船頭馬かたのゑせたるかぎりは、立よるべき店にはあらす。むかし孟母の借屋を撰て、衡竄といやがられしは、三錢五錢の利を争ひ、手をうち^{あし}商人のうへにして、かゝる類にはさしもあらじ。いでや市中に栖を

求むとならば、此隣こそ子を育る最上の所なるべけれ。然るにあるじ、かつてある先生の門に乞て、號を指筆と定けるとぞ。其意いかならむ。あるじもおほくとして、予に此記を書いて求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。猶も心の奥の海のふかき心やあらむ、又は山の井の淺きやらむ、いさ波しらぬ予にもとむる事や。かの天に張ゆみ

といひ出けむ、安らかなるためしにもあらで、いとむづかしきなぞを造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばずとむづかりて、固辭すれどもうけひかず。とまれかくまれ筆染てと、ひたぶるに責られて、聊取次のすゝろぞを書ちらして、是を記とはせよとて贈るとしかり。

送月堂記

西濃成戸の里に世々栖る人の號を求けるまゝ、送月堂の三字を興へぬ。猶其記をと乞ふに、只ふかく思ひ入たる謂もなけれど、其事しばしにして止事を得ず。

そもく此地景、東は朝もよみ岐嶺の大河清く流れて、雨に着る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山々まで、嶺をつらねて甚速からず、又ちかゝらず、只よき程に屏風をひけるごとし。

もとより城下へだゝれば、風塵の喧しき

なく、常に農業の目を慰るあり。四時の佳観いひつくすまじく、何を揚てか此名とはせん。されば蛙なく驢夜、時鳥にのこる有明、秋は稻葉の露に宿し、冬は霜雪に冴る詠、只夫月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物皆入といへば出るはこもり、歸るといへば来るを兼ね、送るといはゞ迎ふは兼つべし。是を以て此二字に定む。限なき影を惜む心也。所謂東坡が亭とは、裏合せの隣ならむも亦おかしからずやと、筆に任せて記とす。

歳旦の口號

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳縣の老人のむづかしきなぞは知るべくもあらず。かた腹いたき歌よみて答ける。

足らで死ねといひし四十もふたり前

つれ／＼草に面目もなし

松歌 井引

金森氏桂五子の庭に一株の松あり。此松

によりて我一語を求らる。そも此求め

はいかにといふに、慈母のいとけなくて

始て髪置ける年、すさびにうへし小松の、

其人と共につゝがなく幾星霜をかさね

て、梢は鶴も巢くふべく、影は雨も凌ぐ

べく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ、

桂子の意必しも此松にはあらず。只たら

ちめをとぶく孝情より、其愛松に及べる

ならし。されば少女の琴を習ふに、かな

らずふき組といふ曲よりす。此はじめの

唱歌を四句にして假名の韵をふめり。自

然に叶へるものか。いと興ありて覺ゆる

まゝ、是に習ひて琴曲のうたひとつ作り

て、かの求めに答ふ。松に琴のえにしも

あればなり。

かりそめにうへしまつ。

人と共に年ふりぬ。

たとへ松はふるくとも。

人は千代をたまたむ。

六林校

補逸

布袋庵風客句巢序

風雅を帶て西東するもの、布袋庵を訪はざるはなし。訪へば句のあらざるなし。

句あれば記せざるはなし。その記する者

三百余吟、かつ一軸に満り。ざるを過

し亥の年の夏、情なき青あらし丙丁を延

きて、池魚の災此冊子に及び、年來のす

さび端なく一時の烏有となんぬ。惜むべ

し、恨むべし。あるじ深く悔み、猶幸に

心に記するを思ひ出／＼、ふたゝびつら

ねてこの一帖を起せり。さるも其もと有

しもの、十にしてそれが一つにも及ばず。

されどもあるじの年いまだ甚老す、徳い

やましに隣ありて、是より書つゞけば、ほ

どなく又棟にも充ぬべし。序を請れてた

はぶれていふ、君みずや青山の草、一たび

焼けば後に生ふ蘇必茂し。されば祝融心

ありて、これより句を多からしめむとて、

初の草を焼くものならむ。何か悔ん。か

の塞翁が馬のためしも、今十年の霜積て

後、さてこそとは知らるべしとぞ。

花のやどり音をのこす鳥の跡たへじ

明和歳庚寅に集る。古稀前一年の翁也有、

蘿の隠家に筆をこる。

山鳥のをはりの國年魚市の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃菴也有の翁とぞまうし。さるは尾張の 君に世ゝつかへたてまつり、中ごろはやどなきつかさにも
のして、 君の御おほえもあさからずぞありける。わかきより月花に心をしめ、雪の
あしたをたのしみ、郭公の一聲をしたひつるが、身にやまひ多きを常にうれへ、はや
くつかへをかへしきこえて、前津の里に世をのがれ、俳諧滑稽のふみどもに心をやり
つゝ、常のすさみにこゝらものせられつれど、深く菴にかくして秘めおかれつれば、
をさく世にしろもの少かりき。おのれがうみの父なる文芦翁は、此翁と交はりて俳
諧滑稽のふみに心をよせられける。おのれがおほちなる楚巾翁と也有翁とは、うるは
しき友なりければ、いよくゆきかひもしゆく、つねにむつまじくうちかたらはれけ
る。おのれも稚き頃、父のせうそこ持たるすさのせにまたがりて、半掃菴に行通ひぬ。
翁天明の始みまかれし後、くさくさの文ども、半掃庵および護花園六林翁のもとに
のこりありしが、月を経年を経るまゝ、彼のふみども世にちりほひ出づ。さるを、天
明のころ大江戸なる南畝のぬし、護花園にたよりもとめて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は

木にゑりて世にひろめられける。されどのこりの文ども猶こゝら多かりけるを、護花園みまかりて後は、あともなくちりうせぬ。垂穂幼より父の志をつぎて、翁の文どものこりなく見るまゝにうつし、聞まゝにかいあつめおきつるが、おのれも亦老の坂路のたのもしけなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれうせなむとおもひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるはうづら衣にもれたるくさぐさの文ども、或は紀行の類也けり。是を羈衣の三かさね四かさねとして木にゑらせつ。亦翁の文に、管見草・短綆錄・古革箱・美南無壽比・野夫談・永代藏・無夜食談あり。詩集を蘿隱稿、和歌の集を蘿窓集、狂歌の集を行々子と云。また俳諧の集に、千句集・五百句集・蘿葉集・蟻塚集・もり桶あり。漢和聯句集二卷あり。昔翁の遺稿にして、みなおのれなからん後のかたみにもとて、たくはへおける物になむ。

文政未のさし

をはり人

たりほ

回回